

比翼の鳥(後編)

比翼の鳥(後編)

とつ

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15070392>

DQ11, カミュ, ベロニカ, カミュベロ, オレの連れがなにか?, エスターク, ドラゴンクエスト11

先日に投稿した作品の後編です。
カミュベロとドラクエ名物裏ボスの共演です笑

今回は挿絵も挟んでおり、なんと自分がカミュベロにどっぷりハマるきっかけを作ってくれた、あいるさんに挿絵を手掛けて頂きました！

この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

あいるさん
user/539668

Table of Contents

- 比翼の鳥(後編)

比翼の鳥(後編)

「ふう…これも違うわね」

ぱたん、と身の丈に合わない大きな本が閉じられて、それを端へと避ける。

文字通り山のような本に囲まれたベロニカは、小さくため息をついて、肩を軽く叩いた。ほぼノンストップでこれ一通り、全て眼を通したのだ。

既に数日図書館に籠りきりであるが、リーズレットの言うように、マナスティスの記述のあった本は最上階の本棚に僅かにあるのみで、後はその文字すら見えない。

「余程禁術として恐れられたのね。ここまで残ってないと、無理矢理記録を消していくたと考へるのが妥当だわ」

そう言って口を尖らせる。どんな魔法も扱う者次第とはいえ、悪用されて人々を危機に晒すような可能性が大いにあれば、そのような処置も必要になるのかも知れない。

ただ、いざその禁術が見つかったとなった時に、何もないのでは対策の打ちようがない。

少しは後世のことも考えてほしいと思わないでもないのである。

何でもかんでも消してしまうのではなく、危険に晒さずに、僅かでも正しく残す手立てはあるはずだ。

「これじゃあ進化の秘法についても目ぼしい本は無いかもしない

わね」

当然マナスティスだけでなく、進化の秘法についても探しながら読んでいるのだが、未だ進化というワードすら出てこない。

勿論書籍はまだうんと残っているので調べる余地は残っているのだが、長期戦は覚悟しないといけないだろう。

"ぐうう~"

少々間の抜けた音。ハッとしてベロニカは顔を真っ赤にして辺りを見渡した。

なんてことはない。自分のお腹の虫だ。だが、こんな豪快に鳴らしてしまうとはレディとした如何なものか。

それが恥ずかしくて周りを見たのだが、幸にして自分一人。

同行したエースは、近くまで食料調達に出ている。エッケハルトたちが協力の要請出してくれた為、クレイモランの兵たちが護衛についてくれているので心配はない。

ただ、普段ならこんな音を聞かれようものなら。

「腹減ったのか？おチビちゃん。盛大な腹の虫が聴こえたぜ」

なんて言う奴がいる。

聞かれたくなかったのに、大体こういう時に限ってタイミングよく傍に居たりする、アイツの得意げにニヤリと笑う表情が浮かぶ。

レディに対して失礼でしょ！と怒ってみれば、その右手にはバスケットに入った食べ物。

いつも一言多いものの、絶妙なタイミング。

しかも、辛くは無いものの、美味しい。

食事だけではない。

大体のものが言う前に揃っているし、無くても大抵のものはどこからかすぐを持ってきてくれる。

——そして傍にいて欲しい時は、言わなくても傍にいてくれる。

時には黙って。時には揶揄うように。時には何も言わず、そして、時には優しく。

それが何よりも、戻れるかもどうか分からない不安を解きほぐしてくれるのだ。

だが。

そんな彼は今、傍にいない。

(…怪我とかしてないかしら。無理してないでしょうね…?)

邪神教といえど、決して戦闘集団では無いだろうから、彼に限って余程のことはないだろうが、それでも未知の集団。自力での傷を癒す手段が一切無いカミュのこと。不安もある。

——それに、こうして離れてみると、この旅の中で、どれだけカミュが自分を支えてくれていたのかと思い知る。

二人だから、どこまでも行けるのだと思っていた。どんなことも超えられると思っていた。

けど実際は。

(カミュがいたから。アイツがずっと支えてくれたから、何も気にしないで元に戻る方法を探せたのよ。なのに…あたしなんて、アイツに何もしてあげられてないーー)

実はそう思うようになったのは、ここ最近の話ではなく、もう少し前のこと。

召使いなんて言って無理矢理連れ出してーー彼がやってくれていることは、これでは実際本当に召使いのようである。

基本的に自分のやりたいことを全て肯定してくれて、一言多いものの、実際はそのやり取りすら心地よく、その心地よさにかまけて彼がしてくれることに気付けていなかった。それくらい、当たり前のように付き合ってくれていたのだ。

でも、自分は一緒にいてくれるカミュに対して何を報いてあげられたのだろう。

そう思うようになったはずなのに、今までの関係を突然崩すような勇気もなく、気恥ずかしさから、感謝の言葉だって殆どかけたことがない。

だからなのか、クレイモランで別れた時。

(なんだか、カミュよそよそしかった…)

理屈ではカミュの言い分は正しかったのだろう。けど、ベロニカにはあの時のカミュは自分を遠ざけようとしているようにも見えた。

(……あたし、愛想尽かされたのかしら)

そのまま両膝を抱えこむ。

今思えば、愛想を尽かされない方がおかしい。

口にしなくても気持ちが伝わっている、そういう関係だとも思っていたが、よく考えればそんなのは理想論だ。

普段から喧嘩ばかりだし、気分転換に彼を言い負かすのはどちらかと言うと気持ちが良い。しかも感謝の言葉一つもなく、召使いのようには扱われれば、嫌気だつてさすだろ。

それに、こんな"やりとり"や"関係"が悪くないと思っているのは、自分だけかも知れないので。お節介焼きとはいえ、限度だつてある。

——時々、カミュはなんでも自分で背負い込もうとする。自分の気持ちを隠そうとする。誰にも迷惑をかけないように。

だから、アツは放って置けない。

そんなカミュの傍に並び立つ為に、この旅に出た。元の姿を取り戻して、堂々と彼の隣に立つために。

そもそも、カミュと自分は出来ることが違う。

得意なことも、好きな食べ物も、趣味だって異なっている。

けど。

(あたしは...それがいいのよ)

自分と同じことが出来て欲しいのではない。

セーニヤと自分がそうであったように、互いに違うことが出来て、支え合いたいのだ。支えられるだけなんてイヤだった。

回復魔法はお互い苦手だが、それを必要としないくらいの能力が、自分とカミュにはある。

(比翼の鳥...ね)

ふとベロニカは、昔ラムダで読んだ神話の鳥の伝説を思い出した。



比翼の鳥。

雌雄二羽の鳥なのに、一つの羽しか持たないとされる伝説の鳥。雄鳥と雌鳥が隣り合い、互いに飛行を支え合わなければ飛ぶことが出来ないという。

それ故に、その互いを想い合う気持ちは一通りではなく、ラムダではその神話に準えられ、仲睦まじい夫婦の例えとされてきた。

幼い頃にその神話を読んだベロニカは、隠れながら、もし自分が好きになる人には、そんな人であって欲しいと思った。

旅に出るまでは、そんな人間は、いても伝説の勇者くらいだろうと思っていた。

しかし、旅に出てからベロニカはその考えを改めるようになる。仲間達は、誰しもベロニカにとって尊敬出来るような一面を持ち合わせていた。仲間だけではない。この世界にはまだまだ自分など及ばない人々がたくさんいる。

カミュと自分。

それでも、まさか最初はあのカミュが自分にとって特別な存在になるなど思ってもいなかった。けど、長く旅を続けて彼のことをちゃんと知るようになり、一緒に戦い続けた今。

気付けば、カミュとそうなりたいと思う自分がいる。

互いに回復が苦手、という互いの欠点があるところが、尚更片目片翼の鳥を思わせる。

カミュと支えあって、二人で飛んでいく。それが密かに抱くベロニ

力の願いであった。

けれど、この姿のままではそんな関係は叶わない。いつまでも、妹か、もっと酷ければ彼の子供というような見た目の立ち位置で終わってしまう。

それが未だ糸口すら掴めていない自分の心に、少しずつ焦りを与えていた。

——と、ここまで考えてベロニカは頭をぶんぶんと振って、余計な考えを払い除ける。今はそれを考えている時ではないのだ。

ダメだ。お腹が減って、しかも一人になってしまうと思考がマイナスになる。

だが、まだエースが帰ってくる気配はなく、かと言って今はこれ以上古書を読む気分にもなれなかった。

「ああ~~~~！！あたしがウジウジしてどうすんのよ、ベロニカ！
ウジウジしたひよっこちゃんなんて一人で充分よ！」

図書館の天井に向かって大きな声で言ってやる。

色々考えたところで今はどうすることも出来ず、ベロニカは本の山の中に倒れ込んだ。

「…あら、なにこれ？」

ぱたぱたと音を立てて崩れた本の中に、眼を通していない本を見つける。

「ああ、童話ねコレ。関係ないと思って読まないで飛ばしちゃった

わ」

古代図書館には似つかわぬ内容の本。

今は古書を読む気にはなれなかつたので、ちょっとした気分転換に、改めてその本を手に取つて開いてみた。

——昔、ある王国に魔物の呪いを受けて何年も眠り続けるお姫様がいました。

王様は娘を目を覚ませようと、國にお触れを出します。娘の眼を覚ました者を娘の夫とすると喧伝したため、大勢の人たちが我こそはと挑みましたが、誰一人その呪いを解くことは出来ません。

そこに、旅に出ていた隣国の王子様が通りかかります。

王子は音に聞こえる魔法の使い手として有名でした。しかし、魔法でも彼女の呪いを解くことは出来ません、

その王子は、最後にお姫様に口付けをします。

するとどうでしょう。ずっと眠っていたはずのお姫様がゆっくりと眼を覚ましたのです。

こうして二人は夫婦となり、二つの國はいつまでも共に栄えることになりました——

「——ビックリするくらいまらない童話ね。こんな内容の本が古代図書館にあることが驚きだわ」

思わずため息をつく内容。搔い摘んで読んだだけではあるが、気分転換に読んだことを若干後悔するくらいつまらなくて、ありふれた童話であった。

こんな陳腐な話では、さすがのセーニャもときめかないだろう。妹は小さい時から白馬の王子様に憧れるタイプであるが、少なくとも、ベロニカはあまりのこの手の話は読んでこなかつたし、内容がこれでは当然ときめきもしない。

「——ええ。ですが、その童話は一概にお伽話とは言えないのですよ」

突然の背後からの声に、ベロニカは飛び起きた。手にしていた本と、かぶった帽子がすっ飛ぶほどである。

「え、エースさん？！戻ったなら声かけてちょうだい！」
「すみません、遅くなりまして。それに…余りにベロニカさまが集中されていらっしゃったようですので」

言葉では謝罪するエースも、愉快そうにくつくつと笑っている。余程自分の驚きようが面白かったようである。

「レディを脅かすなんて悪趣味よ」

気恥ずかしさで、ベロニカは顔を赤くして彼を少し睨んだ。全く、世の中意地の悪い男ばかりだ。

「これはこれは、失礼を致しました。ベロニカさまもその様なお話に興味がおありなのですね」

「集中力途切れちゃったから読んでみただけよ。それより、さっき言ったことって…」

「ああ、お伽話ではないと言ったことですか。まあお食事をしながらにしましょうか」

エースはベロニカに食事入れたバスケットを手渡し、先程の童話を話の肴にして、二人は遅めの夕飯をとる。

「あの童話で語っていた、口付けによる王女の目覚め。王女は元々魔物の呪いによって、眼を覚ますことのない眠りについたのです」

「ええ。現実的に考えれば、ラリホーの強力なタイプってところかしら？」

「そう考えても差し支えないかと。ここで大切なのは、呪いを解いた王子が指折りの魔法の使い手であったこと。恐らく、目覚めの魔法"ザメハ"も使うことが出来たのではないしょうか」

ザメハ。勇者一行では、カミュとシルビアのみが使うことの出来る魔法であり、魔法が殆ど使えないカミュにとっては貴重な呪文である。

「ところでベロニカさまは、最も相手に魔法の効果を伝える方法はご存知ですか？」

「勿論。相手に直接触れる、ってことね。相手が遠ければその分効果も薄れる」

回復を行いたい場合、その者に直接触れる、特に傷に直接触れて唱える場合が一番効果的だということだ。

その逆も然りであり、呪いも唱えた呪者から最も近い者が受けやすくなる。

「その通りです。仮に強力なラリホーによる魔法であれば、それを解くにも強力なザメハが必要になる——まああくまでラリホーもザメハも例えですがね。より強い魔力を相手に注ぐ為に、相手に直接触れる必要があるとすれば…」

ここまで聞いてエースが何を言いたいのか分からぬベロニカではない。

「だからそれが、き、キスすることだったて言うの？それなら別にキスじゃなくたって…」

「いえ、大切なのはそこなのです」

エースはぐっと前に乗り出した。

「自分を昂らせる感覚…それが魔法を更に強力にします。ゾーンに入る…ベロニカさまもご経験がお有りでは？」

「え、ええ。まあ…」

口付けでゾーンに入れることなど知らないが、戦いの中で感覚が研ぎ澄まされ、普段以上の力を発揮したことは幾度もある。

「大切に思う心と、それを自らの手にしたいという気持ち、それが己の心を昂らせ、魔力を大きく引き上げる。その魔力の乗った口付けによって呪いが打ち解かれる…実はこれは実際に事例のあることです」

「え、ええ？ そうなの？ あたしは聞いたことないけど…」

口付けで呪いが解ける、という物語くらいは先程の童話も含めて聞いたことくらいはあるが、実際にある話とは聞いたことがない。

「ええ。史書には記録がございました。愛はどんな強力な呪いも解く…形だけ見ればそうですが、その実は魔法の効力を高め、より効率よく魔力を相手に伝えるという手法だった訳です」

「なんだか、随分夢のない話になったわね…」

別にそんなに興味のある範疇ではないが、お伽話の現実的な側面を見ると、やはりベロニカでも萎える。目覚めを待つ王女さまと王子さまの愛の口付けが、実は昂った状態におけるキスがだったなど、セーニャが聞いたら少々悲しむだろう。

「ではベロニカさま。お伽話のお話はそれくらいにして…お腹も満たされたようですし、そろそろ本題へと参りましょう」

「本題？」

意図を掴みかねるベロニカに対して、エースは笑みを浮かべてから、懐から一冊の古書を取り出す。

厚い表紙もかなり傷んでおり、年季を感じるいかにもといったその古い本。

「エースさん、その本は...？」

「"進化の秘法"。この本の題名です」

にこにこと笑むエースの手にある本を見て、ベロニカは眼をパチクリとさせる。自分達が今一番知りたい内容が書かれていると思われる本である。一体いつこんな物を見つけたというのか。というか、見つけた時点で飛んでくるべき話ではないだろうか。

「...えっと、ごめんなさい。いつからその本を？」

「食事を取りに行く直前に、偶然本棚から見つけました。お腹が減っていては内容も頭に入らないと思いまして、食事の後にしようかと」

あっけからんと言われては責める気も失せてしまい、ベロニカは苦笑した。

「興味深いことが書いてありますよ」

そう言われてエースから本を受け取ったベロニカは、早速眼を通していく。

これは、誰かが書いた手記のようである。

——進化の秘法。あの様な魔法が我々の手に入ったことはまさに僥

偉でしかない。我らが偶然手にしたこの魔法は、この魔法を浴びた者の本来持てる魔力を強制的に増大させ、より強力で絶大な力を得ることの出来る術である。

この術は我々が儀式の過程で偶発的に生み出してしまった禁術であるが、これは日々我々が御神に祈りを捧げた賜物であろう。我々はこの術を大いに研究し、我々の力として管理する必要がある。邪神によってもたらされたこの力を使い、いずれ我々の手で、この世界に終焉を与えるのだ——

——国の姫などというのに恋慕した愚かな信者が、勝手に進化の秘法を模倣して魔物化した。幸い、模倣ゆえその真の力を發揮することはなかったが、それでも一国を滅亡の危機に晒すほどの力であった。なんということか…改めて進化の秘法の素晴らしさを思い知らされる。これ程強力な魔法を手にしたのだ。勇者は邪神との戦いで倒れた。もうその仲間も既にいない。もはやこの魔法を使えば、世界に我々に敵う者などあるまい。終末の時はすぐそこまでやってきている——

——ユグノア…我々の研究に眼をつけておったとは…。突然やってきたユグノア王国の軍隊に、我らの禁術が奪われてしまった。やつらは進化の秘法を封印するとかどうとか抜かしておったが…あれ程の力を得られる魔法をそのような扱いしか出来ぬなど、愚の骨頂よ…。だが…もう過ぎたことだ。進化の秘法は使われることなく、誰にも知られずにあの国の地下で朽ちていくのだろう——

読み進める内に、ベロニカの表情が少女らしからぬ険しいものに変わっていく。

誰が書いたものかは分からない。が、どのような者が書いたのかは内容から充分推測出来た。

「邪神教…進化の秘法はやっぱりあの宗教の信徒が生み出した魔法だった」

やはり口クな連中ではなかった。それは自分の思った通りで、この結果はカミュの推測通りだった訳だ。

そして、彼は今そのアジトに潜入している。もしかしたら、自身で何かを掴んでいるかもしれない。

「進化の秘法は、邪神教の信徒が生み出した魔法だった。そして、進化の秘法がマナスティスの模倣じゃなくて、その逆。進化の秘法こそが本家の禁術だったということです」

「そして、その力を危険視したユグノア王国が、自国の地下に封印した…今ももしユグノアに封印されているとしたら…」

あの神殿に違いない。あれは間違いなく進化の秘法を封印する為に造られた神殿だ。

「けど…どうしてユグノアにも何も伝わっていなかったの？これだけ危ないものなら、自分の国にくらい記録に残そうとしなかったのかしら？」

「危険過ぎるが故に、ユグノアが何も記録を残さなかった、ということが考えられます。模倣したマナスティスですら、一国を滅ぼしかねない力を持っていたー勇者やその仲間たちが存命なら他にやりようもあったのかもしれません、その本によると、もう彼らが亡くなった後の話の模様です」

勇者はニズゼルファを討伐した際にウラノスによって命を落とし、ウラノスはウルノーガとなり、セニカは時の番人として忘れられた塔で果てなき時を過ごしており、唯一寿命を迎えたと思われたネルセンも、魂だけの存在になって試練の迷宮で待ち構えていたのだが、そんなことはエースは知る由もない。

「…ですが、神殿の最深部、進化の秘法を封印した場所には、流石

に何か残しているでしょう。もしかすると、進化の秘法を封印した手段なども書いてあるやもしれません」

エースの言葉を聞いて、ベロニカは頷いて立ち上がった。

「ベロニカさま？」

「イレブンに伝えないと…ユグノアに行くわよ、エースさん！」

嫌な予感がする。

酷く偶然じみているのだ。

サマディーでの書物の発見から、この本の本が見つかるまでの全てが。

邪神教、ユグノアの神殿、サマディーに残された古書、進化の秘法。

考えてみれば、これらが一つに繋がるなど、最初は一つの仮説でしか無かった筈だ。

なのに、全てが重なった。

殆どトントン拍子過ぎて、怖いくらいに。

(アイツなら…カミュだってそう思うはず)

この場にいれば、カミュも同じように考えるだろう。この手の思考については、カミュと自分は似ていると思っている。

だが、今それを共有できる彼はここにいない。伝えたくても、彼の居場所が分からない。

カミュが何かを掴んでいる可能性もあるが、今はこのことをすぐにでもイレブンに伝えるべきだ。

ベロニカはその場に本を置く。その表紙にこっそりと一枚のメモを残して。

クレイモラン兵に事情を説明してから、足早に古代図書館を離れた。

分からぬ。けど、恐ろしいことが起きそうな気がする。

勇者の星がサマディーに落ちて、それを確かめに行く時の感覚に似ている。

恐ろしい何かが、知らぬうちに足音を立てて自分たちの周りに近付いてきている。

ルーラを唱えながら、そう直感的にそう感じていた。

潜入して、10日程経った頃だろうか。

サマディーの炎天下の中で相変わらず布教活動を行う男の信者に入信を頼み込んだカミュは、大いに受け入れられ、彼らのアジトとの門をくぐった。

勇者の相棒として顔が知られているので、当然変装もしてはいるので、とりあえず今のところ見破られている様子はない。

が、カミュを辟易させたのは、入信から始まった謎の儀式や、信者達の語らい、邪神による滅びの世界を語る講談…などなど、陰鬱とした雰囲気の中で行われる一連の教団の日常だった。

話も出来るだけ懸命に聞いた。儀式もなるべく真面目にやって、題目も心を無にしながら唱えた。これも全て、教団の信頼を得るためにある。

ただ、そんな苦行を強いられながらもここ数日である程度分かったことは、この教団は形骸化している訳ではなく、本気で邪神による世界の滅亡を望んでいるということだった。

全員では無いが、複数名、闇の魔法を扱う者が在籍しており、儀式で披露される力を見る限り、確かな魔力を持っているようである。

また信者達にはちゃんとそれぞれの役割を与えられており、組織化されていると感じさせた。

ただ、組織化されているのであれば当然教団のトップがいるはずなのだが、カミュは未だに顔すら見たことがない。信者の言葉の中に教祖さま、という言葉が聞こえたことがあるので、いるのは間違いないのだ。

ただ、カミュはそれをそれ程気にしている訳でない。

新参者の前に顔を出す方が、組織のトップとしては危険なことに違いないことが分かっているので、別にそれがおかしいことだとは思わなかった。

なので、何かを探るのであれば、完全に日が落ちた人の眼の届かない常闇の中一一。

その夜、闇夜に紛れてカミュはゆっくりと動きだした。

連中の眼を欺きながら過ごした十日間程度の日。漸くお目付無しの身分を得ている。

「——とは言え、許可を出した者しか入れぬ部屋もあります故、ゆめゆめ勝手に入ろうなどと思わぬことです。邪神さまの恩恵を受けられなくなりますよ」

(要らねえよ、そんな恩恵！)

そう思いながらも、表面上はあくまで丁寧にお礼を述べた。むしろ、そう言う部屋にこそ用があると言っても過言ではないのだ。

欺くために纏ってきた魔法のロープを捨てて、足音一つ立てることなく、アジト内を探索する。

(…部屋の鍵はここだな)

鍵管理庫から、鍵束を拝借(盗む)して懐に入れる。

幸いというか、アジト自体は自力で見つけるには困難な場所にあり、中の構造もなかなか入り組んだ建物ではあるのだが、肝心の中の警備は古典的で、扉の施錠は殆ど鍵を使ったものばかりであった。

建物の入り組みに関しても、世界中旅してきた力ミユからすれば児戯にも等しい構造である。

許可が必要、と言わされた部屋に関しても、鍵一つで管理していることを、すでにこの数日で力ミユは確認していた。

だが、それ以外の問題が早々に発生する。

(…やっぱりオレじゃ内容が分からねえ)

侵入した部屋は様々であったが、そこに保管されていたのは、やはり古書の類か、儀式などに使われる悪趣味な像、謎の宝器(売れば高そう)やらと、そんなものばかりである。

(古い本は読めねえ…となると持ち帰るしかねえか)

物品はさておき、書物は持ち帰ればロウやベロニカなら解読出来るもしぬれない。そう考えて、とりあえずめぼしいものは拝借(盗む)していく。

そうしているうちに、また一つ、新しい部屋の扉の前に立ち、鍵穴に鍵を差し込んだ。

(…ん？鍵がどれも合わねえ)

手に入れた鍵ではこの扉を開くことが出来なかつた。
ならば、とすぐに懐から細い針金を取り出す。

(こんな技が役に立つ日が来るとはな)

かつて盗賊であった頃に身につけた、鍵開けの技である。あの頃は専らケチな盗みのために使われていた技術が、こんな形でーー誰かの為に使われる日が来るなど考えたこともなかつた。

僅かな時間の後、細い針を差し込んだ先が、カチャリと小さな音を立てた。

(…開いた！)

一応罠がある可能性もあるので、ゆっくり、注意深く扉を開く。
が、特に何が起きる訳でもなかつた。

足を踏み入れた部屋は、今までの倉庫のような部屋とは違い、広い書斎のようであった。

手入れが行き届いており、人が出入りをしている痕跡がある。他の部屋とは違って品があるし、広い部屋に一つだけある机と椅子も中々お洒落なインテリアで、特定の人しか使えないような物であることを示していた。

(ここだけ雰囲気が全く違う。へっ、何か臭うぜ)

元盗賊の鼻が、ここまでは今までと違うと触れている。

カミュは慎重に部屋を探索していく。

(…ん？こいつは…まだ新しい)

机には羽ペンがインク瓶に立ててあり、その傍にある本は最近まで書かれていたように見える。

書いたのが最近であるなら、自分でも読めるかもしれない。そう思ってその本を手に取ろうとした、その時。

"ギュイーン！！"

「？！」

突然、機械音のような不気味な唸り声と共に、何かがカミュ目掛けで飛んできた。

咄嗟に身を翻してそれを避けたが、飛んできた何かはカミュの持っていた荷物を貫き、中身を粉々にして、背後の本棚ごと貫いた。

(一体何が起きた？！)

同時に抜剣して、飛び散る本の紙吹雪に身を隠しつつ、カミュは周囲に素早く眼を向ける。

まず見えたのは、それぞれ無機質な赤い三つの光だった。そして鈍く磨かれた銀のメタリックボディに、それぞれの手には剣とハンマー。

尾っぽのような物の先には、先程飛ばしたと思われる弓矢が見え

る。

あれは、極悪の殺戮マシーン——

「キラーマジンガ？！」

しかも三体。何故こんなところにと考へる暇もなく、二の矢が飛んできた。

「くっ！」

神速を誇る力ミュではあるが、なんせ場所が力ミュの戦闘向きではない。広いとはいえ、所詮は書斎なのだ。二の矢は避けるだけで精一杯であった。

"ギ……"

が、タイミングとしては完璧であったろう初手も次の攻撃も避けられて意外だったのは敵も同じようで、一瞬ではあるが、キラーマジンガの動きが止まる。

この機を力ミュが逃す筈がない。

しなやかかつ超高速で敵の懷に飛び込み、相手の一体に斬りかかり、同時にキラーマジンガの右腕が宙を舞う。

"ギュンッ…！！"

ただ、キラーマジンガは手強いモンスター。

この攻撃でも、腕を一つ斬り落とすのがやっとで、即座に体勢を整え、三身一体となって斬りかかってくる。

三本の剣と二本のハンマー。全てを避けるのは剣の達人である力ミュであっても容易ではない。

(…ちっ、ジリ貧だな)

しかも広くない戦場が、力ミユの持ち味であるスピードを発揮させない。三方から囲まれ、鬻るような連続攻撃を受け続ける。

斬撃と打撃が幾度か身を掠める。その都度に鮮血が飛び、部屋の壁を赤く染めた。

それでもなんとか隙を作つて、一体を思い切り蹴飛ばした。

"ギギ..."

同時に、他の二体も力ミユから離れた。一体では敵わないと判断しているらしく、連携して攻めるつもりらしい。機械モンスターだけあって感情に左右されない合理的な判断をする。

実際に三体連携して攻めて来られる方が厄介だ。

今は距離を取つて、三体同時に尾っぽの弓を引き絞つてこちらに狙いを定めている。

「…随分危険な任務になっちまったな。これだけ危ねえ橋渡つて何も無かったなんて割りに合わねえぜ。……いや」

脳裏にあの勝気な赤帽子の少女の後ろ姿が浮かぶ。

「アイツの為なら……割りに合わねえことなんて一つもねえんだよ、この野郎！！」

力ミユはパッと剣を捨て、両手の武器をブーメランに持ち替えた。

キラーマジンガも何かと反応したが、もう遅い。

「デュアルブレイカー！！」

左右上下から飛び交う猛烈なブーメランの嵐が、キラーマジンガ達を斬り刻む。

接近戦だけだと思っていたのだろう。突然の中距離からの攻撃に虚を突かれた三体は、最後は反撃も出来ずに全てガラクタとなった。

「へっ…オレのしぶとさを舐めるなよ」

カミュは餞別とばかりに、殺人マシンの残骸に血の塊を吐いて捨てる。先程手に取りかけた本を、既に瓦礫の山となった部屋の中で探す。

あの時、キラーマジンガは明らかにあの本に手が触れたタイミングで襲ってきた。

それは、あの本に触れるとそうなるように仕掛けてあった罠に違いないし、そうしなければならない理由があの本には何かあった筈だ。

折角手に入れた他の物品は、先の戦闘によって切り刻まれてしまっている。

「あの本からでも何か分かればいいんだけどな。…お？ あった」

瓦礫の山の中から見つけた本は、幸にして無事なようである。開いてみると、やはり最近書かれた物のようであり、カミュにも読むことが出来た。

本に眼を走らせる。その内容を読み進めるうちに、元々鋭い眼が、更に凄みを帯び、表情は険しいものへと変わっていく。

そして、読み終えると同時に、秘密裏の潜入ということも忘れ、力

ミユはアジトの入り口も吹き飛ばす程の猛烈なスピードで飛び出した。

——ベロニカが、危ない！！

ベロニカとエースがユグノアへ戻ると、すぐに一人の兵士が駆け寄ってきた。

「ベロニカさま！エース殿、お戻りで」

「ええ、ちょっとね。イレブンはどこ？」

「それが…つい先程、ルーラでお出かけになられました」

ベロニカは額に手を当てた。なんというタイミングの悪さか。完全に入れ違いでいる。

「実は…遺跡の発掘が先程終わったのです。神殿の最深部から何かを封印していると思われる岩壺が見つかり、イレブンさまとロウさまがお調べに…その後、険しい顔をなさったお二人がすぐにデルカダールへ行くと…」

ということは、二人はデルカダール王にこの話を聞いたのだろう。王女のマルティナと將軍グレイグにも当然この話はなされることだろう。

彼らに話をしなければならない様なことが神殿であったのだろう。ベロニカの中でも嫌な予感が膨らんでいく。少なくとも、進化の秘法がとても危険なものだということは二人も掴んだのだ。

「ベロニカさま。我々も神殿へ行きましょう」

ベロニカはエースの方に振り返る。

彼もまた緊張してきているのか、いつになく、口調が興奮気味だ。

「イレブンさまのお帰りを待たなくとも、私達であれば、イレブンさまが何を知ったのか分かります。進化の秘法がどんなものかを知るだけでも、我々だけでも立てられる対策があるかもしれません」

「…そうね。いいかしら？」

「ええ。余人を通さないようにと厳命されておりますが、ベロニカさまとエースさまであれば」

兵士はそう言って神殿までの道を開き、許可された二人は地下へと降りていく。

心なしか、以前来た時よりも、ずっと空気が重い。

暫く降りた先に、以前も来た神殿の入口が現れる。

(よく見たらかなり大きいわねこの神殿…ずいぶん奥深くまで造られているみたい)

以前来た時は、まだ入り口程度しか入れなかつたが、今は地下全体が神殿なのでは無いかと見紛う程の大きさであることが分かつた。

前にこの神殿に来てからそこまで時間は経っていない。恐らく、入り口付近だけが埋める様に隠されていて、中はそのままの状態であつたのだろう。

「行きましょう、ベロニカさま」

「ええ。足下に注意して」

ベロニカは小さい身体ながら、エースの前に立ち、二人は神殿の奥へ足を踏み入れる。

イレブン達が遭遇しなかったとはいえ、魔物が潜んでいる可能性もあった。

ベロニカは戦えないエースの代わりに前に立ち、辺りを警戒しながら進む。

が、魔物は出てこない。

500年以上も封印されていたとなれば、例え一匹ぐらい紛れ込んでいても、普通の魔物では生きられないのかもしれない。

長い道であったが、劣化した通路以外は大した障害もなく、二人は深層部へと辿り着いた。

巨大な部屋の中央には、大きな岩で出来たこれまた巨大な壺が見える。

「…あれがこの神殿に封印されているものね」

恐らく、進化の秘法。その魔法の根源がこの中に詰まっているのだ。

「ええ、恐らく。少し…壺を調べてみましょうか」

二人は、岩壺に近付く。人間が十人は入りそうな程大きな壺。その中央に石碑があり、古い文字が刻まれている。

ベロニカが一行ずつ、文を指で追う。

「我ら四人、禁術をここに封印する。進化の秘法は決して人が使ってならぬもの。人がその禁術を使えば、忽ち大いなる災厄となる。かの力は邪神にも匹敵する。地獄の帝王は決して目覚めさせてはならない……ローシュ…ローシュですって…？」

文末に記載されていた名前。突然のローシュの記載にベロニカは戸惑った。

ローシュといえば、伝承で語られる勇者一人しか心当たりがない。四人といえば、その仲間である賢者セニカ、魔法使いウラノス、英雄王ネルセンの三人であろう。

地獄の帝王。これが進化の秘法で人が変わってしまった姿であるということは想像がついた。

なのにどうしてローシュが、そしてその仲間たちの名が出てくるのか？この禁術は勇者が倒れた後、邪神教が生み出し、それを危険視したユグノア王国が奪って封印したとのと、エースから見せて貰った古書には書いてあったはずだ。

「勇者ローシュとその仲間たちは、禁術で変わり果てた人成れの果てである、地獄の帝王と対峙したのです」

ベロニカが振り返ると、エースはニッコリと常のような柔軟な笑みを浮かべている。

なのに彼が口にした言葉は、今のベロニカにとっては違和感しかない。

いや、悪い予感の正体は最初からコレだったのだろう。

「…しっかり説明してくれるんでしょうね？」

「ええ勿論。我々に残された古代の書物にはこうありましたが、これを見て確信致しました。勇者ローシュが邪神ニズゼルファを倒そうとしていた頃、同じように邪神を倒そうとした者たちが、自らの魔力を極限まで高める禁術"進化の秘法"を生み出した…。しかし、それは生み出したそれは想像を超えた魔術…。進化の秘法を使った者は、魔物と化しただけでなく、あっという間にその国だけでなく、周辺の国まで滅ぼしたということです。その姿を人々は恐れてこう呼びました。地獄の帝王"エスターク"と」

ベロニカはエースから素早く離れて杖を構える。

「アンタ…最初からあたし達を騙していたのね？」

「申し訳ございません、ベロニカさま。ですが…こうしてようやく"世界を滅ぼす禁術"を挙むことができました。勇者とその仲間が邪神へ挑む前に討ち破り、封印したこの進化の秘法に…！」

エースの笑みが、今までの柔軟なものから、明らかに不気味なものへと変わった。

ぶわりとベロニカの背筋に悪寒が走る。

未だに笑みを崩さぬエースの身体から、酷く邪悪な魔力が溢れているからだ。これは、闇の魔法を扱う者に見られる魔力である。

隠していたのは、本音だけではないらしい。

そして、エスタークなる魔物は、かつて勇者一行がニズゼルファに挑む前に進化の秘法によって生まれ、その脅威ゆえ勇者達に倒され、禁術ごと封印されたらしい。

「…一体何者なの？って聞こうと思ったけど、今の話聞いて大体見当ついたわ。アンタ、邪神教の信徒ね。多分だけど、勇者に倒された…最初に進化の秘法を使った人達が今の邪神教の前身。だからアンタもこの話を知っていたし、最初からこの進化の魔法を手に入れることが目的だった…」

「さすがはベロニカさま、聰明でいらっしゃる。ですが…少し違います。私は邪神教の信徒であり、現教主になります。まあご存知の通り、表向きはサマディーで研究を行っている学者なのですが」

「どうでもいいわよ、そんなこと。いつからあたし達を騙して…っていうのも聞かなくても今なら分かるわ。最初からよ。あたしと力ミユが、サマディーで古書を見つけた時……この本も、古代図書館で見つけたっていう本も、全部アンタが用意したデタラメね？」

ベロニカは懐からサマディーの古い研究室で見つけた本を取り出してエースに突きつけた。

思えば、これが見つかってから全てがトントン拍子だった。

バクラバ砂丘の洞窟に偽の本を置いて、サマディーの学者としての地位を利用し、旅をする自分たちがその場所に訪れるように仕向ける。

星の番人と呼ばれたサマディーに偽書とはいえ邪神と関わるような物を置けば、興味を持つには充分だったに違いない。

古代図書館で見せられた偽書に至っては何せ、マナスティスのことなど、事実を交えながら作られた作り話なのだ。

信じてしまうには充分な信憑性があった。年月を得たように本を痛ませる方法などいくらでもあるだろう。

邪神に関わる何かがユグノアにあるように思わせ、自分は先にユグノアで待っている——神殿も、復興に集まった人々に信徒を忍ばせて発見させたのかもしれない。

そして、今度はユグノアの手を借りて神殿を完全に発掘させた。

「あたしとカミュは、神殿から遠ざける為にわざわざクレイモランに行かせた。だからカミュがあたし達と別行動を取るって言った時もすぐ賛成したのね？一緒にいるより、一人の方がアンタにとっては都合が良かった…どう？その通りじゃない？」

董色の瞳はエースを睨みつけつつも、ベロニカは、ふん、と鼻で笑ってやった。

よく考えてみれば、お粗末な点も目立つのだ。それ故に、ずっと傍にいながらも、彼の魂胆を見抜けず、まんまと全て彼の掌で踊らさ

れただけでなく、あまつさえ優秀な男だと思い続けていた自分への自嘲でもある。

「お見事です。そこまで分かっていらっしゃるとは…さすがベロニカさまです」

軽い拍手をしてくる明け透けな態度が癪に触る。

「…ですが、少し訂正させて頂きたいと思います」

「訂正ですって？何を今更…」

「確かに、あなた達を遠避けるように画策はしました。ですが…今私はこれからもあなたと行動したいと思っています、ベロニカさま」

エースがゆっくりと近付いてくる。

その不気味さにベロニカは杖を向けつつも、思わず後退った。

「な、なにを言って…」

「ベロニカさま…やはり私の思った通り、あなたはとても素晴らしい女性だった。あなた程の人はそうはない。魔法使いとしての優秀さ…魔法の力や博識さだけではありません。知的探究心、想像力に推察力、そしてどんな困難にも物怖じせずに前へと向かう度胸も勇気も…あなたは全てを兼ねている。そして何よりも…あなたは美しい。あなたには…私の創る世界に生きる資格がある」

「世界を創る…？生きる資格ですって？」

邪神教は、この世の終末が訪れるように謳っている宗教だ。その教主が、作る世界、とはいっていい何のことだろうか。

「ええ。私はこの世界を"救済"します。エスタークの力によって一度口トゼタシアは滅びる。世界に終わりを迎えさせるのです。その後、滅び、何もない世界に、新たな世界を創る…元々は私はその世界を一人で創造する…そのつもりでした。ですが、今はあなたと…ベロニカさまとなら更に素晴らしい世界が創ることが出来る…心か

らそう思うのです」

ベロニカは思わず耳を疑った。この男の言っていることが最初から最後まで、ベロニカほどの聰明な頭脳でも何一つ理解できない。

「…ごめんなさい。全く意味が分からないわ。なんであたしがアンタと新しい世界を創らないといけないの？」

「全てを滅ぼした後、この世界に新たに優秀な人を残す為ですよ。私は確信しました。あなたの二人なら、きっとこの醜い世界を新しく素晴らしい世界に変えられます。そこで私とあなたで新たな人々を…そして世界を創るのです。そして…その世界で私たち二人は神と崇められるでしょう」

そう言ってエースはベロニカの前に片膝をついて、手を差し伸べた。

「もちろん、その為にはベロニカさまに元の姿に戻って頂く必要がありますが…そんなことはエスタークの力があれば造作もないこと。エスタークの力を手に入れた私であれば、あの物語と同じように…私の魔力をあなたに注ぎ込むことが出来る…！あなたをすぐに元の姿に私が戻してご覧に見せましょう」

エースが言っているのは、あの陳腐な物語のことだ。

どうやらそれは本当だったらしいが、ベロニカが姿を取り戻すのに、エスタークとなり、その溢れんばかりの魔力を、その"方法"で注ぎ込むつもりらしい。

「そして二人で…この世界を創造するのです！ベロニカさま…この新しい世界のために私の傍にいてはくれませんか？」

それは彼にとって渾身の"告白"だったのだろう。

好きになった人から睦まじい言葉で愛を囁かれて、それを受けた。

ベロニカも無論、そんな日が来ることを夢見たことがない訳ではない。

すう、とベロニカは深く息を吸う。

「……全っ然、お断りよ！！バッカじゃないのアンタ！！」

これでもかという大声で怒鳴りつけて振ってやる。当たり前だ。最大級メラガイアーをぶつけなかった自分を褒めてやりたいくらいだ。

こんな告白は残念ながら…というか当たり前だが、全く望んでいたようなものではない。

エースは今までのよう上品に振る舞ってはいるが、初めて会った時の知性や品性が見た目だけがそのまま。

その眼に映るのは己の野望と、そこにはベロニカが全く望まない世界。

断られたエースは意外だったのか、その端正な顔が少し歪む。

「何故ですか？お姿は元通り、しかもこの世界が私たちの思い通りになるというのに…」

「そんなこと言わなきゃ分かんないの？！そもそもあたしはそんな新しい世界になんて興味は無いし、今のこの世界がいいの！元の姿に関してはお生憎さま、自分で戻る方法を探すわ。別にアンタの崇拜する"エスタークさま"のお力を頂かなくても結構よ！」

愛し合った男女が二人で創るもの。

それが愛であり、家族となり、その先に未来がある。それが一人の女としてベロニカが考える世界だった。決してエースの語るような世界ではない。

「ベロニカさま、その聰明な頭脳でよく考えてください。あなたにも都合の良い話のはずです」

「都合がいいとか悪いとか…そんなことで人を好きになる訳ないじゃない。人は…この人と一緒にいたい、この人のために何かしてあげたい…そういう、もっと熱くてもっと強い気持ちがあって、初めて人を好きになれるの」

脳裏に青くてツンツンした髪の男の後ろ姿が浮かぶ。

「…ああ、なるほど。あなたという人は」

瞳の奥に映る想い。そんなベロニカの心内が読めたのか、エースは冷ややかに笑う。

「どうやらあの男のことを本気で好いているということですか。あの、元盗賊の男のことなどを」

「…っ！だったら何だって言うのよ…アンタには関係ないでしょ」「いいえ、大ありがとうございますベロニカさま。同じ勇者のお仲間だったとはいえ、粗野で品の無い元盗賊の男のなど…住む世界がまるで違う。第一、あの男はあなたと違って魔法など全く使えないではありませんか。あなたにとっては何の役にも立たない男。ベロニカさまに相応しいとは全く思えません。あなたには、あなたを輝かせることが出来る相手こそ相応しい」

カミュに対するエースの酷薄な言葉。自分の身が裂かれるように痛かった。

共にいた時はそんなふうに思ってる素振りも見せなかったのに、そうやってカミュを軽蔑していたのだ。

メラメラと胸中で怒りの炎が猛る。

「…そうよ、アイツはあたしとも違うし、アンタとは違う。魔法

だって殆ど使えない」

意を得たとばかりにエースは口元を釣り上げる。

「アンタの言う通り口は悪いし、すぐ突っかかってくるわ。人の話は聞かないし、ぶっきらぼうだし、なのに肝心な時にウジウジしちゃって…ホント、とんだひよっこちゃんよ」

ホムラの里で、"勘違い"から始まったあの日から。

出会った時から、今までずっと彼は変わらない。

世界を救う旅をしていた頃から、二人で旅をした時も。

「…ムカつくくらい気が利いて、器用で、世話焼きで、作るご飯が美味しいくて……イレブンと肩を並べて戦えるくらい強くて…けど、本当は凄く優しいのよ。喧嘩だってするけど、一緒にいて楽しい。一緒にいると落ち着く。あたしは…」

カミュのことが、好きだ。

けど、そう思いつつも、今までとは一緒にいるだけだった。

自分ばっかり与えてもらってばかりで、その彼のために何も出来ることがなかった。

だったら、尚のこと傍にいたい。

何でもいい。これからだっていい。傍にいて、彼の為に何かしたい。

これからだってたくさん喧嘩だってするし、ストレス解消に言い負かしたりもしたいけど、本当は感謝の気持ちだってもっともっと伝えたい。

「カミュはあたしやアンタとは違う！けど、あたしはそれだからいいの。あたしとアイツは出来ることが違う…なら、アイツが出来ないことならあたしがやるし、あたしに出来ないことをカミュがしてくれる！だから二人なら色んなことが出来る！どこにだって翔んで行ける！」

ベロニカの強い想いを前に、みるみるエースの顔が歪んでいく。

「住む世界が違う？あたしはアンタが望むそんな世界の方が尚更お断りよ！大体あたし達が命がけでイレブンと救った世界を、あたしが捨ててそんな世界を望むわけがないじゃない！そんなことも分からぬアンタみたいな大バカ男…アンタこそ、このベロニカさまに相応しい訳ないでしょ！顔を100万回くらい洗って出直しなさい！！！」

「おのれ…言わせておけば…！！」

最後の大バカ、というのはかなり効いたらしい。プライドが高いだけにバカと言われるのは相当傷つくらしく、また意中の相手も盗賊崩れくらいに思っていたカミュに奪われ、怒り心頭といったところか。

右手に真っ黒な魔力が集まり始めた。

どうやら、"学者なので戦えない"というのも嘘らしい。どう見ても彼が扱っているのは--

(闇の魔法…！)

あの魔法を使えるあたり、人だからといって手心を加えてはいられないようだ。

ベロニカもまた魔力を掌に集中し、あっという間に魔力は燃え盛る火の玉へと姿を変える。

「ドルモーア！！」
「メラゾーマ！！」

エースは高位の闇魔法をくりだす。ベロニカもまた同等位の魔法を放った。激しくぶつか合う二つの魔法は、さながら太陽とブラックホールのようで、互いを打ち消すように霧散する。

「こうなれば私の取る道は一つです、ベロニカさま。無理矢理でもあなたを私のものにしてみせる」
「アンタ、ホントにサイテーね。アンタが創った作り話と同じじゃない」

マナスティスで国の王女を力尽くで我が物にしようとした男の話である。

「あれは本当のことですよ。古代図書館に置いてあった古書は本物です。邪神教の男の一人が愚かにも王女などに懸想し、教団の研究記録を使って勝手に作り出したのがマナスティスです。ですが…本当の進化の秘法の力はあんなものではない。エスタークの力さえあれば、あなたを完全に私のものにすることなど容易いこと…」

「お生憎さま。アンタの力じゃムリよ。だって、あたしの方がまだずっと強いもの」

確かにエースは思っていたよりも実力者の方がいたが、それでもまだベロニカの敵ではない。先程のメラゾーマも、ベロニカの全力には程遠いものだったのだ。

あの一撃で、相手の力量は大体推し量れた。それはエースとて同じ筈。

「だからエスタークの力の復活なんてさせないわ。残念だったわね」
「ええ。今の私の力ではあなたには勝てそうもありません。ですから…少しの間、あなたにはジッとして貰いましょう！」

そう言うとエースは地面に手を付いて、謎の魔法陣を展開した。

(これは...召喚の魔法！)

瞬時にその魔法の正体を見抜いたベロニカだったが、問題は召喚されたその魔物であった。

"ギュイーン！！"

異様な機械音に、鈍く光る銀色のメタリックボディが二体。

「キラーマジンガ...！！」

何度も対峙したことのある相手。だが、魔法使いのベロニカにとつて、こいつは圧倒的に厄介な魔物である。

「フフ...あなたが如何に協力な魔法使いとはいえ、私のしもべ達が相手では意味を成さないこと...あなたも充分お分かりな筈」

そう自信たっぷりに笑うエースの言う通りであり、ベロニカは唇を噛んだ。

キラーマジンガの強敵たる所以は、その装甲や、容赦なく繰り広げられる無慈悲な攻撃も
さることながら、時折魔法を跳ね返す光の結界を纏っていることだ。

これは魔法使いにとっては天敵と言っても良い。魔力が高ければ高い程、跳ね返ってくる力も強くなる。ベロニカにとっては非常に相性が悪い相手である。

ベロニカが手強い魔法使いであることを見越していたということだ。

(準備してるだけはあるってことね…けど！)

が、ベロニカはそれで全くお手上げになるような魔法使いではない。

「双竜打ち！！」

鞭の妙手でもあるベロニカが、杖から鞭へと得物を持ち替えた。同時に、振り抜いた鞭から二匹の赤青色の竜が召還され、キラーマジンガの一体に舞って襲いかかった。

"ギ...ギ...！！"

一体に大きなダメージを与え、一体の動きが止まる。
が、完全に倒すまでには到らず、しかもまだもう一体残っている。
双竜打ちは鞭技の中でも隨一に強力なのだが、単体にしか攻撃出来ないのがネックである。

もう一体が剣とハンマーをぎゅんぎゅんと振りかざして襲いかかって来る。

「くっ...！」

鞭ではあの攻撃を受けることは出来ない。ベロニカは再度杖を構え直した。

一体とはいえ、猛烈な連續攻撃。そもそも接近戦は元々得意ではないし、しかも身体の小さいベロニカでは受け切るのは至難だった。

何度も受け損ねた敵の剣先が、ベロニカの小さな身体を服ごと切りつけた。

更に、先程双竜打ちを撃たれたもう一体も、体勢を立て直しつつあ

る。

「ふいふ…心配することはありません、ベロニカさま。私はあなたを殺したいとは思っていない。あなたが私の物になればいい…。私の魔法が効くまで弱って頂ければそれで良いのです」

進化の秘法が封印された壺の前で、ベロニカを後ろから観戦するだけとなったエース。その顔には余裕すら漂う。

キラーマジンガが一度距離を取った為、ベロニカは杖をつきながらも、その後ろに立つエースを睨みつけてやる。

「何度だって言ってあげる。アンタって本当にサイマーのおバカさんね。そこまでおバカだと最早笑えるわ。…アンタの物なんかになるくらいなら、いっそ死んだ方がマシよ」

「…もう少し己の立場を分からせてあげる必要がありますね」

本当にこの男の愛情の基準とは何なのだろうか。

一番堪えていると思われる言葉に、さらに醜く顔を歪めたエースは、妻にしたいと思うレディの前でとても言えるようなことではないことを宣ってサッと手を払った。

「さあキラーマジンガ！そやつが私の妻になるように、もう少し痛めつけてやれ！」

二体揃ったキラーマジンガが異様な機械音を上げて再度襲いかかってくる。

あの男の歪んだ感情は置いておくとして、キラーマジンガの力は本物である。

(鞭じゃ間に合わない…！)

こうなったら、魔法を使うしかない。

鞭は元々仲間のサポートを受けながら使っていた武器である。最初の一撃で一体を仕留められられなかつた以上、今一人で複数体と戦うには魔法を使うしかないのだ。

キラーマジンガの結界は元々完璧ではないため、普通に魔法が通ってしまうことも少なくなく、今はその可能性に賭けるしかない。もはや失敗を考えている余裕もなかつた。

「…丸焦げになりなさい！！ギラ…グレイド！！」

ギラ系最強とされる凄まじい業火の柱が無数に現れて、二体に降り注ぐ。

"ギュ…ン…ギュム…"

そのうち、一体が完全に炎に飲み込まれた。先程双竜打ちを受けて弱っていた方だ。

魔神の如き機械兵が、文字通り丸焦げになり、チリになっていく。

が、もう一体は身体が反射をするような光を見せた。呪文が術者に跳ね返ってくる。

「あなたとあろう方が無謀な真似を…ですが、これで終わりです。お任せ下さい。私は回復魔法も多少扱えますので…あなたは死ぬことはありません。眼が覚めた時には…全て終っています。いや、始まっていると言うべきでしょうか…」

その様子を見たエースが、勝ち誇ったように笑う。

(くっ…！)

跳ね返ってくる魔法に対して防御姿勢を取った。自分の放った業火が、そのまま返ってくる。

龍が顎門を開けたような灼熱の炎を前に、ベロニカも眼を瞑った。

その時、ふわっと身体が浮く感覚に見舞われる。

(あたし...翔んでるの?)

カウンターによる魔法の熱さがやってこない。痛みもないので、魔法で吹き飛ばされた訳でもないらしい。

何より、この感覚をベロニカは知っていた。
何度も旅の途中で同じような経験がある。

レディに触るにはちょっと雑だけど、危ない時、素早い彼がこうやってよく助けてくれた。

身体中を包む場違いな温もり。

ぎゅっと閉じていた眼を開くと、飛び込んできたのは、思った通り、青い色。

「カミュ！！」

そこにいたのは、やはりカミュであった。
騙された連続の後なので、俄には信じられない。

カミュがギラグレイドが当たる前に、ベロニカを抱えて、驚くべきジャンプ力で大きく跳躍してその場を離れたのだ。

「シャインスコール！！」

同時に片手でブーメランをキラーマジンガに投げつけた。

そのブーメランは直接キラーマジンガに当たることなく空へと打ち上がり、光の矢を雨のように降り注がせる。キラーマジンガの身体は無数の矢によって貫かれ、スクラップとなってしまった。

「ベロニカ！大丈夫か！？」

着地したカミュは腕の中のベロニカの安否を案じた。小さな身体は切り傷や打撲を負い、服も痛々しい程に破れている。

が、ベロニカは幸いにも軽傷であった。ただ、カミュがもう少し遅かったら、怪我では済まなかつたに違いない。

「あたしは大丈夫…って、アンタも怪我だらけじゃない！」

その助けてくれたカミュの姿に、ベロニカは驚いた。自分も今の戦闘で中々傷だらけだが、カミュはそれ以上にたくさん傷を負っていた。頬についた傷からは血が滴っている。

「オレは大丈夫だ。見た目ほど傷はたいしたことねえ」

そう言うカミュの傷付いた頬に、ベロニカの小さな手がゆっくり触れる。



無理をしたのだろう。きっとエースはカミュの向かった邪神教のアジトにも元々罠を張っていたに違いない。なのに彼はここまで駆けつけてくれた。

「来て…くれたのね」

まるで彼の存在を確かめるように、ゆっくりと。

それは嘘でもなんでもなく、間違いなくカミュであった。

「ああ、おまえが古代図書館にメモ書き置いていってくれたおかげですぐにここが分かった。ヤツが…エースが今回の黒幕って訳だ」

「ええ…どこまで知ってるの？」

「多分、全部だ。アイツの部屋にあった日記を調べた」

カミュが忍び込んだのはエースの書斎であった。現教主の姿が見えないとは思っていたが、まさかエースが教主で、しかもつい先頃まで共に行動していたことにカミュも驚いた。

が、それよりも驚愕した事実は、記されたエースの日記の内容である。

日記には、エースの計画が事細かに記されていたのだ。

「オレたちが手に入れた本は全部アイツが用意したニセモノだった…まんまと騙されたぜ。エースは知ってたんだ。あれがユグノアに封印されたのが、昔ローシュたちに倒されたエスタークってバケモノが残した進化の秘法だってことに。けど、邪神教の力じゃどうにもならねえから、イレブンとオレたちを利用したってところだろ」

エースの残した日記を読み、今回の全貌を知ったカミュ。当然、一

緒にいるベロニカに危険が迫っていることが分かり、飛ぶように駆けつけたのだった。

「あたしとしたことが…不覚よ。もっと早くアイツの考えに気付いていれば」

「これだけ周到に張り巡らされたら、気付けやしねえよ。おまえのせいじゃねえ。けど、少し怪しいと思ったから、メモ残してくれたんだろ？おかげで間に合った」

古代図書館に向かったものの、二人の姿がなく、残された本に貼つてあったメモを読んだ。

「ユグノアの遺跡に行く」

勿論、この本が偽物であったことはカミュにもすぐ分かった。あのメモが無ければ自分はベロニカの居場所を見失っていた。

そしてユグノアの兵士が声をかけてくるのも聞かず、神殿へと踏み込み、何とか間に合ったというところだった。

あと一步遅かったかと思うと、カミュは内心慄く。

もしかしたら、彼女が失われてしまっていたかもしれない。二度と失ってはならないのに。

(二度…と…?)

イレブンと話した時に見た走馬灯、そして感じた、喪失感。

いつか、どこかで彼女を失ったことがある気がする。そして今よりも癒えることのない深い悲しみと、後悔の念に苛まれたことがあったようなことがあった気がする。

イレブンはいつか話すことになると言っていた。彼しか知らない何らかの事実。恐らく、この喪失感はそれのことに違いない。

(オレはーーいや、世界はベロニカを失ったことがある)

あれは多分、夢などではなかった。
あれから時折、静寂の森が瞼に浮かぶ。

そこには、小さな墓石があり、時折自分がそこに参っている姿さえよぎる。

けれど、それが本当だろうが夢だろうが、今はそうではない。

もう後悔だけはしたくなかった。カッコ悪かろうが泥臭かろうが、相棒の言う通り、ちゃんとベロニカの気持ちと向かい合うと決めたのだ。

「…アイツ、なんでおまえまでここに連れて来たんだ？」

単にエスタークの復活を求めているのなら、別にベロニカとここに来なくてもよいはずだ。むしろベロニカが邪魔をすることは考えれば分かるはず。

「…エスタークの力で世界を滅ぼして、その後の世界であたしと一緒にになる気なんですって」

「…は？」

意味が分からず、場に合わない素っ頓狂な声をあげてしまう。

「だから！エスタークになって、あたしを娶ってムリやり伴侶にする気なのよアイツ！」

なんとイカれたヤツなのか。
アイツならベロニカを幸せに出来るかもしれないと、一瞬でも考えた自分が腹立たしい。

「勿論、そんなお誘い全力でお断りしてやったわ。あたしは…」

アンタのことがーーなんて勢いでそんなことを言いそうになって、慌てて口をつぐむ。

「おい、なんだよ？」

「と、とにかく！あんなヤツの伴侶になんてなりたくないし、この世界をアイツの好きなようにさせる訳にはいかないわ！いくわよ、カミュ！」

ベロニカの言う通り、絶対にそんなことはさせない。

「…ああ。そうだな。この世界も…オレの大切な女も、絶対アイツに渡したりしねえ」
(――え？)

さり気なく、なんだか凄く大事な言葉を言われた気がした。

「ちょっとカミュ、それってどういう…」

が、既にカミュの青い瞳はエースの方へと向いている。元々眼付きが鋭いが、更にギラリとエースを恐ろしく睨みついている。

「我が眷属を全て倒してきただと…おのれ小賢しい…！」

一方のエースは予想だにしない事態の連續に、驚きを隠せないようであった。

「一日に何回もお人形の相手させやがって…けど、もう諦めな。キラーマジンガが何体いたところで…オレたちは倒せねえ」

ベロニカは再び"とこしえの杖"を構え、カミュは"銀河の剣"と"名刀斬鉄丸"の柄へと手をかける。

カミュがいれば。

キラーマジンガが出てきてもベロニカはサポートの魔法や鞭での攻撃に回れる。こうなれば光の結界も怖くない。

「…ふん、切り札は最後まで取っておくものだ！」

が、エースは苦々しい表情ながらも、再び魔法陣を展開する。

「また何か召喚するつもりよ！気をつけて！」

「どうせキラーマジンガだろ！」

展開された魔法陣から、再び何かが飛び出し、二人に何かを放った。

カミュは抜刀術で、それを難なく切り落とす。

真っ二つに折れたそれは矢だ。だが、不意打ちとは違い、構えていればこんなものなんでもなかった。

「やっぱりキラーマジンガね！」

「ああ。…いや、少し違うみてえだ」

カミュの言う通り、光の中から現れたのは鈍い銀色のボディではなく、血のような真紅の色のボディ。キラーマジンガより一回り大きい。

「キラークリムゾン！」

キラーマジンガの上位種である、紅い殺戮機兵。切り札というだけあるのか、一体だけが出てきた。

ただ。

「今更コイツ一体で何が出来るって…」

いかにキラーマジンガより強いとはいえ、今の二人にとっては、一体くらいそんなに苦戦するような相手ではない。

「…まさか！」

ベロニカは、キラークリムゾンの背後に視線を移した。

エースが、右手に黒い魔力を集中している。
しかも進化の秘法を封印している岩壺の前で。

「カミュ！！」

「分かってる！！」

即座にカミュが跳んだ。が、それを阻止せんと立ちはだかったのが、召喚されたキラークリムゾンである。

「クソッ！時間稼ぎの人形が…邪魔すんじゃねえ！！」

即座に右腕を切り落とすが、機械兵は尚もブンブンとモーニングスターを振り回してくる。

エースにとって、キラークリムゾンは捨て石でしかなかったのだ。
ただ、そんなことは関係なく、ただ命令のままに暴れるからタチが悪い。

隙についてベロニカは、カミュが戦う横をすり抜けてエースの方へと走るが、既にエースの右手には充分過ぎる程の魔力が溜まっていた。

「ははは…切り札は最後まで取っておくものだと言ったでしょう！
私の切り札はそう…この進化の秘法！ベロニカさま…お見せいたしましょう！これが地獄の帝王の真の力です！！」

そしてその右手を岩壺に向けた。

「ドルモーア！！」
「メラゾーマ！！」

暗黒の魔法を打ち消さんとベロニカは加減なく炎魔法を放った。
が、それよりも早く、エースの放ったドルモーアが岩壺を深く傷付けた。

「壺が…！！」

ビシビシと音を立てて壺がひび割れ、割れ目からおぞましい色をした煙が溢れる。

「これで…この口トゼタシアは私のーーー」

言葉の途中で壺が完全に割れて、ブワッと瘴気のような真っ黒な何かが壺から溢れ、そのままエースを飲み込み、メラゾーマもその瘴気に飲み込まれて霧散する。

「まずいわ！」
「ベロニカ、一度離れろ！」

キラークリムゾンをやり過ごしたカミュが再び跳んで来て、ベロニカを抱えて壺から離れようとする。

それをキラークリムゾンが邪魔しようとすぐに追いかけて来たのだが。

カツー——

その瘴気の中心で凄まじい爆発が起こり、キラークリムゾンはそれに巻き込まれてしまいどこかに消えた。

同時に、とんでもなく、邪悪な気配が神殿中に充満する。

おかげで逃げることのできたカミュは、ベロニカを抱き抱えたまま、その隙に全速力で瘴気の塊から離れた。

ただ。

「おいおい…マジか」

振り返ってそれを見る。そう咳きたくもなる。

あの黒々とした巨大な闇嵐の中心からは、あの邪神ニズゼルファにも劣らない禍々しい力を感じる。

この凄まじい闇の気配は、神殿中、いや、上のユグノアどころか、あっという間にロトゼタシア大陸を飲み込むだろう。

ズシン、と大地を揺らすような巨大な足音と共に、闇の中からその全貌が姿を現した。



——両手に持った巨大な二振りの黄金の大剣が、何よりも眼を引く。

その剣を振るうのに見合った筋骨隆々な巨軀に、双角の兜の被ったような頭。全身はまるで褐色の鎧に身を包んだ武者を思わせる魔人。

そしてその顔に光る、鬼灯の様に赤く光る三つの眼。

"グオオオオオオオオオオオ..."

その咆哮はビリビリと空気を震わせる。背中を向けて逃げ出したくなるくらいだ。

「こいつが…エスターク…」

かつて勇者達が対峙した地獄の帝王。

人間がどうこう出来るようなレベルではないように思える。

この感覚はまさに、聖獣ケトスを駆り、黒い太陽に乗り込み、ニズゼルファが姿を現した、あの時のものと同じ。

重苦しい空気。全てが闇の力に覆われ、その邪惡の中心で、八人が世界の命運を賭して死力を尽くして戦った。

それが同じような敵を前に、今はベロニカと二人だけ。

それでも。

「…あたし達で、やるしかないわ」

ベロニカは杖を握り直す。

放っておけば、間違いなくロトゼタシアはコイツによって滅ぼされる。地獄の帝王の渾名は伊達ではなさそうだ。

「…ああ。ったく、骨が折れそうだな」

「全くよ。力ミユ、アンタもちょっとは役に立ってよね！」

「へっ、誰に言ってる」

二人は再びそれぞれの得物を構える。決してみくびって良い相手ではないが、いつものように軽口を叩く。冷静さは欠いていない。普段の自分達を見失わずにいるにはこれが一番だ。

「——あとで！」

「後で？なんだ？」

力ミユが隙を見せずに、眼だけをベロニカに向ける。

彼女はこちらの顔を見ずに、前だけ見据えている。けど、自分に向かって言っていることは分かった。

「——これが終わったら、後でさっき言ってたことの意味…ちゃんと教えなさいよ！」

"オレの大切な女を、絶対にアイツに渡したりしない。"

力ミユは、自分は確かにそう言った。本気でそう言ったのだ。

「…ああ。何回でも聞かせてやるさ」

ちゃんと自分の気持ちを伝えるため。

大敵を前に、力ミユは小さくも不敵に笑って応えた。

三つの真っ赤に光る眼が、そんな二人をギロリと睨みつけ、ぐぐっ、と巨大な剣を振りかぶる。

「来るぞ！」

身構える二人の頭上から、振り上げた強烈な剣が落ちてくる。その剣から漏れ出る霸気、とても受け切れるような一撃ではないことぐらい分かる。

またもカミュはベロニカを抱えて、その場を脱する。

エスタークの剣は二人のいた場所を斬ったに過ぎなかったが、その威力は想像を絶するものであった。

たった一振りの単純な打ち下ろし。なのにそれは地面を深々と割つて抉り、周囲を諸共吹き飛ばす程の爆発のような衝撃。

まさに、"帝王の一撃"というのに相応しいものだった。

が、それに呆気に取られている二人ではない。

「メ…ラ…ガイアー！！」

カミュから下ろされたベロニカが、最高位の火炎弾の魔法を放つ。

「燃え尽きろー！！」

それも、三連発の大盤振る舞い。全てエスタークの巨軀に直撃する。

"オオオ…"

エスタークがよろけた。さすがはベロニカの魔法だ。だが、それで

もさして大きなダメージを負った様子はなく、すぐにもう片方の手に持った巨剣を振り上げてくる。

「振り切らせるかよ！」

今度は代わってカミュが、"帝王の一撃"が振り下ろされる前に、その腕を回転しながら何度も斬りつけた。

斬撃に勢いを削がれ、巨剣は振り下ろされることなく終わる。

"グオオ..."

憎たらしげに唸る帝王。鬼灯のように赤く光る三つ眼で、二人を睨みつけた。

大したダメージではないが、良い流れである。

スタッ、と軽い音を立てて、カミュがベロニカの横に着地する。

「さすがに力強いわね」

「ああ。けど、効いてない訳じゃない。……って言うか、アイツおまえを娶るつもりじゃなかったのか？ どう見てもオレ毎殺そうとしてるよう見えるんだが…」

エスタークの先の一撃は、カミュだけを狙うものでなく、完全にベロニカをも巻き込むような一撃であった。当初の目的は諦めたのであろうか。

「多分、もう自分が何者かも分かっていないのよ。進化の秘法で人知を超えた力を得てしまった分、人としての記憶が失われたんだわ」

ベロニカの言葉に、カミュは口ウの言っていたことを思い出した。

"魔力の増幅は、言わば毒のようなもの。己を容量を遥かに越えれば、魔物へと姿を変えることもある"

それが更に行き着いた先が、進化の秘法。

魔物化どころか、強大な力と引き換えに、人としての感情や記憶を失ってしまったということか。

最早、本当にこの世界を滅ぼし、地獄に変えるまで暴れ続けるだけの存在になってしまったのだろう。

「...哀れだな」

新たな世界を創り、ベロニカと生きるという野望すら忘れてしまっている。情けをかけようと思わないが、どちらにしても自分達に出来ることは、あれを倒して、破壊の輪廻を止めることだ。

そのエスタークは、今度はぐぐっと背を仰け反らせ、思い切り息を吸い込む素振りを見せる。

「プレスが来るわ！」

これに対し、ベロニカは直ぐにプレス系のダメージを抑えるフバーハの魔法で自分とカミュを包んだ。

更に、燃え盛る業火を地獄から呼び寄せる。

「地獄の帝王には...地獄の業火がお似合いよ！ギラ...グレイド！！」

無数の炎の柱が舞い上がり、エスタークへと向かっていく。エスタークもまた、その大きな口から灼熱の炎を吐き出した。

神殿が、溶けるのではないのかと思うような、苛烈な熱に覆われる。

ギラグレイドも相変わらず凄まじいが、エスタークの灼熱もまた凄まじい。

押しつ押されつの炎の攻防。負けてなるものかと、ベロニカは小さな身体で必死に踏ん張っている。

(足下を狙う！)

そんな彼女を援けるべく、カミュはその隙をつき、エスタークの足下を斬り払おうとした。大きな敵は、足下から少しづつ弱らせるのが定石であり、今バランスを崩せば、灼熱のブレスの勢いも削がれ、ギラグレイド毎エスタークに跳ね返るだろう。大きなダメージが狙える。

だが。

(ーーなんだ？)

灼熱を吐き出していたエスタークが、手にした二振りの巨剣を幾度も叩くようにして、ガンガン剣を打ち鳴らした。

異様な霧囲気をカミュが感じた次の瞬間、エスタークは剣を振り切り、漆黒の竜巻を発生させる。

「まずい！！」

さながら、"地獄の竜巻"というものだろう。荒れ狂う暗黒の竜巻は、灼熱もギラグレイドをも巻き込み、火炎の大渦となって逆にベロニカに襲いかかって来た。これではフバーハも効果がない。

「ベロニカ！！」

即座にカミュはベロニカの許へと飛び、彼女を抱え、すぐにその場を脱しようとした。が、炎の渦の範囲は絶大で速く、無情にも避けようとしたカミュの背中に襲いかかる。

竜巻による斬撃に肉を裂かれ、炎が傷ついた身体を焦がす。

鉄鎧のような血の臭いと、肉の焦げる音。

「カミュ！！」

思わずベロニカも叫ぶ。だが、それでもカミュは止まることなく、ベロニカを抱えたまま、なんとかその場を脱することが出来た。

「ぐっ…」

カミュの苦痛に満ちた声。身体が動くのもそこまでであった。

既にエースの書斎でのキラーマジンガ3体との戦いで消耗しており、今の攻撃はあまりに強烈で、もう立ち上がることも難しい。

(クソっ…身体が動かねえっ…！)

身体に力を入れても、激痛が走るばかりで動かない。かと言って、動けないなどと弱音を吐いている場合ではない。無理矢理にでも身体を動かそうとする。

「ダメよ！ジッとしてなさい！」

咄嗟にベロニカが祝福の杖を翳す。ほんの少しづつだが、背中の傷が塞がっていく。

だが、敵はそれ待ってはくれない。

"グオオオオオオオ！！"

再び咆哮したエスタークは、巨剣を天へと掲げ、力を溜め始める。

稻妻を纏う刀身。ベロニカもよく知っている技であった。

「あれは…ギガブレイク！」

勇者イレブンの得意技にして、最大級の威力を誇る雷の剣技。あんな巨剣から放たれては、今の自分達に防ぐ術がない。

かと言って今は。

(カミュがまだ動けない...)

自分の祝福の杖では回復力に限界がある。

先程の火炎地獄の竜巻から、カミュは身を挺して守ってくれた。

(今はあたしが守らなきゃ！)

自分にしか出来ない、自分らしい戦い方で、彼を守る。

ギガブレイクに匹敵する程の魔法。すっ、と眼を閉じて、ベロニカは小さな掌に魔力を集中させる。

「イオ…グランデ！！！」

董色の瞳がかっと見開き、ギガブレイクを放とうと剣を振りかぶったエスタークに対して光弾を放つ。

光弾は帝王に直撃し、一面を照らすほどに神々しく輝くと同時に大爆発を起こした。

「グゴオ…！！」

エスタークがその威力に、吹っ飛ばされるように体勢を崩して仰け反った。効いているのかは分からぬが、少なくともギガブレイクを放つ前に止めた。

「イオグランデ！！イオグランデ！！イオグランデー！！！」

押し込めとばかりに、ベロニカは多量の魔力を消費しながらもイオグランデを連発する。

少しでも力ミュの回復する時間を稼ぐ為だ。

連續で大爆発が起きて、エスタークは雪崩のような爆発に徐々に飲み込まれていく。

「…っ！まだまだあーー！！」

高威力の呪文の連発に、一気に失われる魔力の多さに身体が、腕が痺れる。小さな身体には尚更堪える。けど、呪文を止める訳にはいかなかった。

巨大な神殿が半壊するまで、ベロニカはイオグランデを唱え続けた。

瓦礫の煙が立ち込めてエスタークが見えなるまで撃ち続け、ようやく手を止める。

「…どう？ベロニカさまに…かかれば地獄の帝王だって…」

絶え絶えの呼吸ながら、滴る汗を拭い、自身たっぷりに笑ってやる。

が、尚も煙の向こうに赤い眼がギラリと三つ光る。

ズシン、と重々しい音を立て、白煙の中からエスタークが姿を現す。

「…しぶといヤツね」

効いていない訳では無い。なんと、エスタークご自慢の巨剣が一本粉々に打ち砕けている。大魔法使いのベロニカの連續イオグランデはそれだけ強烈であった。

"グオオオオーッ！！"

だが、敵はさらにその上をいく。愛刀を碎かれたエスタークのその顔は怒りそのものであり、再び怒りを帯びた雄叫びをあげると、残る一本の剣を天に翳し、刀身に魔力をを集め始める。

ばちばちと稲妻を纏い、再びギガブレイクを放とうとしている。

「ベロニカ！！」

カミュは魔力を消費し過ぎて、動けなくなったベロニカを抱き寄せる。

そして、身体全身で彼女を包むようにしてエスタークに背を向けた。

(おまえだけは…死なせない！！)

その小さな身体に、あの剣技を受けさせはしない。

命に代えても、彼女だけは。

「カミュ！！」

悲痛な叫びが神殿に響き渡り、無常にも豪剣が二人目掛けて振り下ろされた——。

「ビックシールド！！！」

が、エスタークのギガブレイクが二人に届くことはなかった。

突然、目の前に飛び込んで来た誰かが、エスタークの巨大な剣を、なんと盾で受け止める。

「うおおおおおおっーー！！」

何事かと振り返ってみると、かの勇者の仲間であった英雄にそっくりのシルエット。

それもそのはず。彼が着込んでいる鎧兜は、かつて本当にあの英雄が身につけていたものそのものなのだ。

「——グレイグ！！」

デルカダールの英雄が、エスタークのギガブレイクを止めた。

英雄の盾でギガブレイクを受け止め、振り切らせなかった。勇者の盾の渾名に相応しい屈強なデルカダールの現英雄である。

「カミュ！ベロニカ！このような敵に二人だけで挑もうなど…無謀が過ぎるぞ！こう言う時はオレたちを頼れ！」

エスタークの剣を受け止めながら、まだ二人を叱責するという余裕である。相変わらずの怪力だ。

「この場合は仕方ないでしょ、グレイグ」

二人の背後から、彗星のような飛び蹴り。グレイグと鍔迫り合いの最中だったエスタークを思い切り蹴り飛ばし、エスタークを後ろへと退け反らせた。

こんな強烈な蹴りが出来る人間は、ロトゼタシアには一人しかいない。

「マルティナさん！」

「遅くなったわね、ベロニカ。でもグレイグの言う通り…今回は相手が悪過ぎる。だから、これからはあの時と同じ…一緒に戦いましょう」

デルカダールの戦姫。マルティナが二人にウインクする。

「一緒に…？」

「そおーよ、二人とも！」

ババッとキレのある動きで二人の前に降り立ったのは、この場に似合わない、けど何故かこんな困難な時でも笑わせてくれるーーそして気持ちを落ち着かせてくれるような格好の、世界最強の旅芸人。

「あらまあ…仲良く抱き合っちゃって。妬けるわねエ」

微笑むシルビアに指摘され、初めて二人はこれ以上無いくらい身を寄せ合っていたことを思い出した。

ババッと高速で二人はお互いから離れる。

無論、顔はバツが悪そうに紅潮していた。

「シルビア、おまえまで…」

「はーい！久しぶりねカミュちゃん、ベロニカちゃん！世界のどこにいたって、こんな邪気が世界を覆ってたら、ロトゼタシアの皆を笑顔に出来ないもの！それに、二人揃って抜け駆けなんてずるい

じゃない！あたし達はナカマ…力を合わせて戦えば、どんな敵にだって負けたりしないわ」

彼は世界を笑顔にする旅に出ていたはず。それが、こんなところまで押して駆けつけてくれたのだ。エスタークを前にも、不敵かつ大胆な笑みは崩さない。

「うむ、あのニズゼルファですら倒せたのじゃ。ワシらが八人揃つて…負けるはずあるまい」

「お爺ちゃん！」

髪を撫でながら、ベロニカの後ろから口ウも現れる。

「二人とも。よく頑張ったぞい。ここからは皆の力で共に戦おうぞ」

そう言って勇者の祖父である口ウは、ベロニカに向けて両手をかざす。

するとベロニカの身体がふわりと優しく青い光に包まれ、先程の攻撃で失われた魔力がグングンと回復してくる。

口ウがベロニカに魔力を分け与えたのだ。

「魔力が戻ってくる…！ありがとう、お爺ちゃん！」

これでまだまだ戦える。

ベロニカは再び杖を握り直す。

それに、口ウは八人と言った。ということは—

「お姉さま！力ミユさま！」

故郷ラムダで姉の帰りを待っていた、最愛の妹の声。

「セーニヤ…アンタまで」
「お二人とも酷いお怪我です。私にお任せ下さい」

同時に二人の傍にやってきたセーニヤは、最大級の回復呪文を唱えた。

「ベホマズン！」

セーニヤの大魔法が二人を包み、みるみるうちに戦いで傷付いた身体が癒されていく。ロトゼタシア隨一、流石はセーニヤの回復魔法だ。

「ありがとう、セーニヤ。アンタまで来ちゃうなんて」
「お久しぶりです、お姉さま。そしてご無事で何よりです」

双賢の妹は、旅に出ている姉のことを常に案じていたに違いない。だが、旅のことや姉の想い人のこと、二人が久しぶりに語らう前に、やらなければならないことがある。

「お姉さま。私達姉妹の使命、再び果たす時が来ました。あの魔物は一いすれは復活を迎えることになったはず。ローシュさまを、かつてセニカさまが支えて、あの"エスターク"を封印した時のように…今また、私達が再び勇者さまを導きましょう」

普段はぼけっとしているセーニヤだが、ここ一番の意思の強さは、姉とそっくりの瞳に現れている。

「ええ、そうね。アイツを…ここで倒さなきゃ、この世界に未来は無いわ。双賢の姉妹、勇者の導き手…久しぶりに再開ね」

久しぶりに揃った双賢の姉妹。セニカがかつて勇者達とエスタークと対峙したように、時が移り、その魂は二つに分かれても、こうして共に宿敵と再び相まみえる。

「助かったぜ、セーニヤ」

カミュもまたゆっくりと立ち上がる。

あの時の仲間がここに集結した。そして再あの姉妹が勇者を導こうとしているということは、皆をルーラを使ってここまで連れて來たのが誰であるかなど考えるまでもない。

「ならオレもーー久しぶりに勇者の相棒を再開するとするか、イレブン」

「宜しく頼むよ、相棒」

かつての勇者の装備に身を包んだイレブンは、穏やかに笑っていた。

「ごめんね、カミュ。遅くなっちゃった。皆を集めるのもそうだけど、これが必要かと思って大樹にも行ってきたんだ」

その手には、あの邪神を打ち破った勇者の剣がある。あの剣はベロニカとセーニヤと共に世界の大樹に奉納したと聞いている。

イレブンもまた、エスタークの存在を知り、一度デルカダールに翔んだ後、グレイグやマルティナと相談して仲間を集め、万が一の時のことを考え、勇者の剣を再び手にしていたのであった。

その途中に、凄まじい邪気の存在を察知して、全員でユグノアに駆けつけたのだ。

「ーーいや相棒、オレの方こそすまねえ。アイツの復活を…止められなかった」

カミュはイレブンに頭を下げる。

とんでもない怪物を復活させてしまったこともある。

だが、この神殿の上には、これを封印した勇者の故郷ユグノアがある。

そんな地下でこんな化け物を復活させてしまったのだ。間違いなく上にも被害が出ている。未だ復興途上の国は、また大きく復興を遅らせてしまうことになるだろう。

「ううん、カミュ。上の皆は避難させたから大丈夫。それに——今で良かったんだ。復興が終わってからこんなのが出て来たらもっと凄いことになってただろうからね。セニヤが言う通り、多分…知らずに放っておかれても、いつかこうなっていたと思うんだ」

イレブンは相棒の肩に手を置く。その手には今一度、勇者のアザが光る。

未来に禍根を残すのでは無い。

今、この仲間たちで、再び世界を救う。

「だから——今、ボク達で決着をつけよう、カミュ」

その眼に、一点の曇りもない。

普段はのほほんとしているとか、ぼーっとしているとか言われることがあるが、さすがは伝説の勇者だ。

「——ああ。やってやろうぜ！」

立ち上がった地獄の帝王が、集った八人の前にたちはだかり、怒りに任せた凄まじい雄叫びをあげた。

"グゴゴ…！！グオオオオオオオオオオオオ！！"

空気を震わせるような帝王の咆哮。だが、ここに集う八人は誰一人として怯みはしない。

かつてサマディー上空で、ケトスを駆り、黒い太陽に挑み、その果てに世界を救った英雄八人。

「——さあ仕切り直しだ、ベロニカ。やられた分、たっぷりお返ししてやらねえとな」

「もちろんよ。あたし達の...勇者とその仲間達の力をたっぷり見せてあげなきゃ！行くわよ！」

再び、エスタークの前に立つ二人。

今また、八人の英雄達の、再び世界を救う戦い、"勇者達の挑戦"が始まる。

「はあああっーー！！」

イレブンがエスタークに斬りかかる。

だが、エスタークはイレブンの攻撃を巨剣で受け、そのまま弾き飛ばした。巨軀の癖に動きは驚くほど俊敏で、剣捌きも無駄がない。

「...くっ！」

その段違いのパワーに弾き飛ばされたイレブンだが、流石の身のこなしでなんとか着地する。

「イレブンちゃん、平気？！」

すぐにイレブンの元にシルビアがフォローにやって来た。が、今度はそのシルビアにエスタークの巨大な右手が襲いかかる。

「シルビア！」
「ゴリアテ！」
「っ…んもう、離しなさい！！」

掴まれて囚われたシルビアは脱しようと足搔くが、手そのものが巨大である。桁違いの握力でシルビアをギリギリと締め上げる。

「シルビア！今助けるぞい！タイガークロウ！！」

"神竜の爪"を装備したロウが、飛び上がってエスタークの腕を連続で激しく斬りつけた。

「私の仲間を離しなさい！爆裂脚！！」

更に続けてマルティナが、連続の蹴りをエスタークの顔面へと叩き込む。

二人の連続技にエスタークも怯み、シルビアを右手から解放した。

「イレブン！」
「カミュさま！」

ベロニカとセニヤの二人が唱えて放った強化魔法が、イレブンとカミュのそれぞれの武器に宿る。

「行くよ、カミュ！」
「任せろ、相棒！」

互いに一度言葉を交わし、二人はエスタークへと突撃する。

二人を近付かせまいとして、エスタークは巨剣を地面に一撃見舞

う。

破裂した地面の残骸が隕石のように二人に飛んでくるが、なんとカミュはそれをいくつも踏み台のようにして飛び移って、エスタークの頭上から足下まで、螺旋状に回転しながら全身を斬りまくった。

"オオオ..."

全身を斬られ、エスタークはバランスを崩す。

イレブンの方へ飛んで来た残骸は。

「うおおおおー！！」
「はああああー！！」

グレイグとシルビアが勇者の進む道を守るが如く、大剣と盾、そして鞭を巧みに操って打ち碎き、弾き飛ばす。

「ありがとう、シルビア！グレイグ！」
「行け！イレブン！」

騎士二人の守った道を走り抜け、イレブンが大きく跳躍し、エスタークの頭上へと迫る。

その手にする勇者の剣が、神々しく稻妻を纏い、イレブンはそれを一気に振り切った。

「ギガブレイク！！」

雷光一閃。

本家ギガブレイク。勇者の放った雷神の如き斬撃が、バランスを崩していた敵の頭上から降り注ぎ、まともに受けたエスタークは派手に地響きを立てて、その巨軀は一度地面へと伏した。

「よし、ダウンだ！」

「うむ、何度も転ばせてやろうぞ」

八人の連携攻撃は、エスタークを盛大に転倒させるまでに至った。確実にダメージを与えている。

だが。

「すぐに来るわよ！油断しないで！」

"グゴゴ...ゴゴゴゴ..."

剣を支えにして立ち上がるエスタークは大きく口を開き、ぐわっと巨大な火球を吐き出した。

「メラゾーマ！！」

「オレに任せろ！」

放たれたメラゾーマを、グレイグが大剣で一振り、一刀両断に真っ二つにしてメラゾーマは霧散する。

が、それを見たエスタークは、再度大きく燃える息を吸い込み、今度は先程より更に大きく燃えて輝く大火球を放った。

「あれは...メラガイアーですわ！！」

「まずい！グレイグ、避けろ！！」

ベロニカが最も得意とするメラ系種の最上位技。太陽を思わせる豪火球。彼女らしい技であるが故に見間違えることはない。

「くっ！」

グレイグは今度は受けずに回避した。流石に英雄とはいえ、メラガ

イアーを打ち消すことは難しい。

避けたメラガイアーが、後方で炸裂して周辺を火の海にする。

幸い、回避して誰にも当たることはなかったが、今のエスタークの攻撃に、ベロニカは違和感を感じ始めていた。

「…アイツ、さっきより強くなつてない？」

ベロニカの言葉に皆が振り向く。

「これだけ攻撃を当てるのに、アイツの呪文や技のレベルがどんどん上がってるわ…確実にダメージは与えているのに」

「…確かにそうね。今までメラガイアーなんて使ってこなかったわ」

マルティナもベロニカに同調する。

「…お姉さま。もしかして、使わなかつたのではなくて」

「"使えるようになった"ってことかしら？」

セーニャとシルビアの言葉にベロニカは首を縦に振った。

「ええ。あたしもそう思う。そして、これが本当の"進化の秘法"の力…」

「…なるほどの。絶大な力を持つだけでなく、常に進化を続けることが出来る禁術、それが"進化の秘法"ということかの」

「…まさか。奴はまだ進化の途中で、まだまだ強くなる、ということでしょうか？ロウさま」

戦いながら、時間が経つほどに魔力が強化され、確実に強くなっていく。

まさに禁断の術。恐ろしい秘法だ。

過去の勇者達が決して目覚めさせてはならないと言い残したのも頷ける。

「それが本当なら…コイツはいつか、邪神を超えるね」

イレブンが額の汗を拭った。確かに今のところ、エスタークの強さは尋常ではないが、それでもかつて挑んだ邪神ニズゼルファよりかは、まだ劣る。

だが、このまま戦況が変わらずに倒せずにいれば、エスタークは更に強くなり、いずれニズゼルファを超える。

こちらは消耗していく一方。確実に不利になっていく。

ここからは更に時間との勝負を求められる、ということだ。

「なら、尚更早く倒さねえといけねえ訳か」

時間との勝負。カミュはそう言うと、その場でトントンとステップを踏み、二人の分身を生み出した。

分身。神速を誇るカミュだからこそ出来る、神業の一つだ。

三身一体の攻撃は、単純に三倍ものダメージを相手に与える。

「ベロニカ、オレにもバイキルトを頼む！」

「任せなさい！ 気合い…注入！！」

そしてそのカミュにバイキルトがかかれば、カミュは恐らく一撃で最も敵に対して大きなダメージを与えられる存在となる。幾多の強敵を擊破してきた組み合わせだ。

ベロニカがバイキルトを唱えると、カミュの二刀の刀身が赤い光を

纏う。

立ち上がったエスタークが、カミュに狙いを定めた。魔物とはいえ戦闘に秀でた魔人。直感でカミュが危険だと悟ったのだろう。

剣先に冷気を集中し始める。

「カミュ、援護するよ！」

「悪い！頼んだ！」

三人のカミュが、エスターク目掛けて疾走する。

そのカミュに向かって強大な氷柱が無数に飛んでくる。マヒヤドだ。

グレイグが盾で守り、マルティナが槍で氷柱を弾く。

ロウはさらに一段上の氷系最高位魔法のマヒヤデスを唱えて対抗し、シルビアはローズタイフーンで吹き飛ばす。

セーニャがピオラでカミュのスピードを更に上げ、イレブンも剣の舞で氷柱を次々に斬り払った。

「メラガイアー！！」

そしてベロニカも得意の炎魔法でマヒヤドにぶつける。氷は溶けるどころか、メラガイアーはそのままエスタークへの道を切り拓いていく。

(今だ！！)

カミュはエスタークの間合いへと飛び込み、深く腰を落とす。

周囲の音が消える。

極限までに研ぎ澄まされた感覚の中で、納刀された剣の柄にゆっくりと手をかけた。

「心眼...一閃！！！」

音の速さすら遙かに超えた神速の抜刀術。

それを三人が同時に、エスタークに抜き放った。

今までには無かった叫び声。相当深いダメージを与えたようである。

心眼一閃を受けた箇所は、バキバキと堅固な装甲にヒビが入り、そのまま音を立てて割れた。

(やった！！)

鎧の一部を剥がしたようなものではあるが、ここを重点的に攻める
ことで、さらにダメージを与えることが出来るだろう。

が、その瞬間。

その傷から、ぶしゅう、と黒い瘴気が勢いよく飛び出して、カミュにかかる。

「うお！？」

咄嗟に身を翻すが、突然のことに避けきれず、顔に直接瘴気を受けてしまい、顔を抑えながらエスタークから距離を取った。

「カミュ！」

「カミュさま！」

仲間がカミュの元に集まる。

嫌な予感がした。ベロニカも彼の元に駆け寄る。

「カミュ、大丈夫？！ちょっと、すぐにセニヤに回復してもらうから顔を見せなさい！」

「ああ、頼む…」

顔を抑えたその手をカミュが離し、その顔が露わになり、ベロニカは、はっと息を呑んだ。

「カミュ…アンタ、その顔…」

「ああ？ どうなってんだよ、ベロニカ」

瘴気を受けたカミュの顔。

ギラギラと、鋭く尖った眼が赤く光る。

元々ツンツンした青い髪は更に逆立ちを増し、口許からは伸びた犬歯が見える。

これは…

「…ビーストモード？」

ベロニカだけでなく、皆がそう口を揃えた。

一見、青い狼。肉食獣のような獣に見えるその姿は、イレブンとセニヤの魔力を分け与えた時に発揮されるカミュの"ビーストモード"の際の顔にそっくりだった。

「…マジか。まあでも、オレがどんなツラしてるかわからねえが…頭の方はスッキリしてるぜ」

「ホントに？大丈夫なのね？」

「ああ。いつもならビーストモードの時はちょっと頭がボーッとしてるんだけどな…今は全然そんなことがねえ」

以前、カミュにビーストモードになった時の話を聞いたことがある。

カミュの力が数倍にも跳ね上がるこの技だが、本能に任せた戦い方なのか、カミュは頭に霞がかかっているような状態らしく、戦いの最中のことをあまり覚えていないらしい。

それが、今は正気を保てているという。

それだけではない。

「——なんか分からねえけど、身体中から力が溢れてきてやがる。今ならビーストモード以上の力が出せそうだ」

そう言うカミュの身体からは、ベロニカの眼にも普段の彼からは感じたことのない程、魔力が立ちのぼり、充実して見える。

確かに、これなら普段の何倍も力を出せるだろう。

「おい、奴が立ち上がるぞ！」

グレイグの声で、再び全員に緊張が走り、得物を構えなおした。

エスタークは怒り心頭のようだが、腹部に先程カミュが与えた一撃で装甲が敗れている部分がある。

「よおし！さっきカミュちゃんが斬った場所を集中的に攻撃するわよ！装甲が無い分、ダメージもうんと大きくなるわ！」

シルビアの作戦に皆が頷く。今をおいて、エスタークを倒せる時は

ない。

「へっ…おまえらは傷の部分を頼む。他は、オレに任せろ」

カミュが、獲物を狙う肉食獣のように構えると、地面を蹴った。

そしてたった一度の跳躍でエスタークの頭上へと躍り出る。

その身のこなしは人智を遙かに超えており
逆手に構えた二振りの剣で、再び全身のありとあらゆる場所を斬り
つける。

「なんて動きなのかしら…」

たった一人でエスタークを斬り続けるカミュの姿を見て、マルティナは自身が攻撃しようとしていたことも忘れている。

あれでは弱点を狙う必要が無いほどだ。

「一体カミュはどうしたというのだ？あの動きは尋常ではない」

マルティナだけではない。グレイグの言葉に仲間も頷き、その動きに圧倒されていた。

眼で追いきれない程のスピードで、次々とあらゆる部分の装甲を切
り落としていくその姿。さながら弱った大型の動物に襲いかかる餓
狼の如くであった。

「楽しいな、エスターク」

戻って一度着地し、ペロリと口許の返り血を舐めるカミュは、血を
浴びた獣そのもの。

戦いを、楽しんでいる。

背筋が思わず震えた。

(アレはカミュ？本当にカミュなの？)

カミュは、決して戦いが好きな訳ではない。

運動や組手をして身体を動かすことは好きであるらしいし、必要であれば躊躇なく敵を蹴散らすが、無駄な争いはしない質だ。

足下に小さな命があれば、それを避けて歩くような男であること、この小さな身長であったから知ることが出来たことである。

アイツは、本当は優しいのだ。

なのに、今のカミュはやたら好戦的で、エスタークという地獄の帝王を相手にしながら戦いを愉悦しているように見える。

最初はビーストモードが無理矢理発動したものかとも思ったが、どうやら違う。

あれは――

「間違いないわい…カミュは、"進化の秘法"の影響を受けてしまつてある」

ロウが張り詰めたような声で、ベロニカの隣に立ってベロニカの考えていることを指摘してくれた。

「お爺ちゃん…あたしもそう思うわ」

先程、エスタークを傷付けた時、噴出した瘴気は、進化の秘法の残滓のようなものであったのだろう。

残滓とはいえ、進化の秘法。その影響を受けてしまったカミュは普段以上の力を引き出せている。

「あの力は常軌を逸しておる。魔力がカミュ本人の容量を大きく超えて、本来以上の力を発揮しておるのじゃ…じゃが、このままではカミュは…」

「お爺ちゃん、それってまさか…」

イレブンの額から嫌な汗が伝う。カミュと二人で口ウから聞いていたことを思い出していた。

――本人にも過ぎた魔力は、毒にもなる――

カミュのビーストモードは、彼の魔力が高まっているが故に、魔物に限りなく近付いている状態だという。

それが、今はそれ以上の魔力の高まり。

そして、"進化の秘法"は、その者を進化させ続ける。魔力は更に高まり続ける。

本人の意思とは関係なく、その魔力は更に――

「…うっ！」

カミュの手から、がらんと剣が音を立ててこぼれ落ちる。

表情が苦痛に満ちると、剣を落としたその手が胸をギュッと抑えた。

魔力が己の容量を超え続けると、いずれは魔物に変わる。そう口ウは言っていた。

「カミュ！！」
「いけない！！」

ベロニカとイレブンがほぼ同時に彼の傍へと走った。

「う、う……ウウオオオーー！！！」

カミュの身体から黒い邪気が溢れ、人とは思えない声で天へと吼える。

あっという間にその身体にも変化が現れる。

指先からはビキビキと音を立てて鋭い爪が伸びる。

犬牙が益々尖って大きくなり、元々ツンツンしてた髪の毛先はビリビリと更に逆上がり張り、顔には幾つもの傷のような模様が刻まれていく。

「グルルル…」

それは、獣と人の中間のような姿。

唸り声と共に口から漏れる、野性の荒い呼吸。

「い、いかん！魔物化してある！」

口ウの言っていたことは正しかった。進化の秘法が、カミュの魔力を限界を超えてなおも引き上げて、その代償にカミュの人としての姿が失われいく。

「ダメ…ダメよ、カミュ！！しっかりしなさい！！」

ベロニカの呼びかけにも、カミュは言葉で応じず、再び苦しむように唸り呻く。

どうにかして、彼の魔力を元状態まで、引き戻さなくてはならない。このままでは身も心も、全て魔物へと化してしまう。

だが、どうすれば良いというのか。

(どうやって魔力を弱まらせるの？何か方法は…魔法は…)

身体能力を下げたり、呪文への耐性を下げる事の出来る呪文はある。

けど、魔力を増やすことだってそもそも難しいのに、下げる事が出来るなんて、自分が魔力を奪われたことぐらいでしか聞いたことがない。

(考えるのよベロニカ！)

自身に言い聞かせて、必死に頭を回転させる。だがそんなベロニカに血のように赤く光る眼が、ギラリと向く。

「ガルル…！」

刃のように鋭くなった爪を彼女に向けて振り上げる。

「ベロニカ！危ない！！」

「！」

咄嗟にイレブンが勇者の剣でその手を弾き、更に左手をカミュへと向けた。

その手に宿る勇者のアザがカミュの眼の前で強い光を放ち、カミュの動きを止める。

「グ…ガ…！！」

金縛りにあったように全身の動きが止まり、カミュは動かなくなつた。

真っ赤な眼だけが、憎々しげにイレブンを睨み付ける。

「こちらもまだ終わっていないぞ！」

更に、グレイグの張り詰めた声。

カミュによってダメージを負っていたエスタークだが、より一層魔力が上がり、その身体から溢れる邪気はいよいよあの邪神を超つつある。

左手を空へとかざすと、一度ベロニカに粉々に潰された筈の片手の剣がみるみると復活する。更に魔力が高まっている証拠だ。

その復活した巨剣の先に、強烈な光る魔力が集まる。
あれもベロニカが得意とする、イオ系最上位の魔法。

「イオグランデがくるぞい！」
「ロウさま！マジックバリアーを！」

それを悟ったセニヤとロウが、いち早く二人の力で大きく層の厚いマジックバリアーを張り、エスタークは剣先に溜まったイオグランデを剣ごと叩きつけるようにして放つ。

眼も眩むような強烈な爆発。
確実に強くなっているエスタークの魔法。

魔法巧者のセニヤとロウの二人が持つてして唱えても、イオグランデを完璧に防ぐことは出来ず、マジックバリアーはガラスのように飛び散り、防ぎきれなかった熱波が仲間を襲う。

それでも。

「…おのれ、なんのこれしき！」

「舐めるな、地獄の帝王！」

「イレブンちゃん、こっちは任せて！カミュちゃんをお願い！」

歴戦の面々は、多少のダメージはものともしない。

シルビアとマルティナ、そしてグレイグが。

敢然とエスタークへと立ち向かっていき、セニヤとロウが回復を行いながらフォローに入る。

そんな五人をエスタークが「かかって来い」と迎え撃つように不敵に笑い、両剣を構えた。

そして全身を震わせて吐き出した、大気すら凍るような光り輝く息が、五人に襲いかかる。

状況は最悪だと言っていい。

エスタークは進化の秘法により更に強さを増し、カミュが魔物へと変わってしまう一歩手前という、畳みかけるような事態。

カミュは勇者の光によってなんとか動きを封じているものの、唸り続け暴れようとして、なおも呪縛を解こうとする。

イレブンも負けじと魔物と化しそうな相棒を睨みつける。

「カミュ…冗談じゃないよ…！ベロニ力を傷付けたりしたら許さないって言ったよね…！」

イレブンの言葉に少しカミュが顔を歪めて、苦しむように首を動かした。

拳を握りしめ、尖った爪が手に食い込み、血がぽたぽたと流れ落ちる。

カミュは、まだ自分を完全に失ってはいない。必死に魔物の力に抗っている。

だが、イレブンもまた抑えつけるのが精一杯で、互いに動けない。

少しでも気を抜けば、動きを止める呪縛が解けてしまう。
勇者の力を持ってしても、動きを止めるのがやっとだった。

(けど、イレブンが直接触れられれば、もしかしたら…！)

信じられないほど、幾多の場面で奇跡を起こしてした勇者の力。

確証はないが、勇者の力でカミュに直接触れることが出来れば、彼を止めることが出来るかもしれない。

しかし、その為には、まずはカミュの動きを別の方法で止めなくてはならない。

(そうだ、ラリホーでカミュを眠らせられれば——)

その瞬間、ベロニカの脳裏にある言葉が過ぎる。

ラリホー、そして眠り。

そして"直接触れる"という、この三つの言葉。

つい最近、どこかで聞いたことがある気がした。

(あ…あの童話…)

古代図書館で暇潰しに読んだ、あの物語。

陳腐ではあったが、魔力が高まった状態でそれを注ぎ込むことで、姫は眼を覚ましたのだという。

(要は魔力の流れを作るってことよ…注ぎ込むことが出来るなら——逆に吸収することだって出来るはず)

魔力を分け与えた、と考えるなら、王子さまの方は自分の魔力を注ぎ込むことで自分の魔力を"相手に吸収させた"ことになる。

そしてその方法とは——

ベロニカは首をぶんぶんと振った。今はその"方法"について迷ってなどいる時ではない。

あのエースが言っていたことだ。本当かは分からない。
分からないけど、エースはエスタークの力を得た際に、自分にそれを試そうとしていた。

やってみる価値は、充分にある。

ベロニカは眼を瞑って首下の赤いペンダントを、きゅっと握る。

ペンダントに引き上げられるように身体がふわりと宙に浮くと、赤く温かい光が彼女を包み込んだ。

「——イレブン…そのままカミュのこと、抑えておいて」
「え？…え？！ちょ、ちょっと！ベロニカ？！」

イレブンは驚いた。

何に驚いたかと言えば、イレブンの前に出て、この攻撃的な力ミュに近付いていくベロニカにもだが、何よりも何故か今、彼女が元の姿へと戻っていたことだ。

胸元の赤いペンダントがチラリと揺れる、妙齢の女性の姿。

天才魔法使いにして、美少女。
自称だが、どちらも本当のことだ。

この緊急時にも、それは揺るぎない。

凛と、そして真っ直ぐと。

その董色の瞳は、魔物化する力ミュへと向いている。

かつかつと、恐れることなく彼の傍へと立った。

力ミュは、動かない身体の代わりに、首を左右に振って呪縛を脱しようと更に暴れる。

「…こうやってみると、アンタとあたし、身長もそんなに変わんないのね、ひよっこちゃん。もう…おチビちゃんなんて呼ばせないんだから」

この姿で、こんなに近く、そして正面に立って彼をしっかりと見たことがなかった。

視線は今は力ミュと然程変わらない。

同じ目線で眼を合わすのは、本当だったら、やっぱり少しくすぐつたい気持ちになるんだろう。

いつもだったら恥ずかしさを隠そうとして、結局口喧嘩に発展するに違いない。あの居心地の良い、軽妙なやりとりに。

ただ、今の彼の瞳には、ベロニカが求めてやまない海のような蒼さは無く、血に濡れたような赤い眼。

それでも、どんなに変わってしまっても、カミュはカミュだ。

「グオオ…！ ガアアッ…！！」

苦しげに吼えるカミュ。もはや、眼の前にいるベロニカの姿が見えているか、どうか。

だが、その恐ろしいカミュを前にしてベロニカは毅然としていた。

「…ずっと考えてたの。あたしはアンタの為に何ができるんだろうって。アンタはあたしの為に色々なことしてくれるけど…あたしがアンタの為に出来ることなんて殆ど無い。だってカミュ、なんでも一人で出来ちゃうじゃない。ホント、器用過ぎるのも考え方のね」

傍にいたい。それは本当だ。

けど、与えてもらうだけなんて嫌だった。

聞こえているかは分からない。

それでも、こんな時だけど、今は本当の気持ちを伝えたい。

「カミュ、いつも…こんなあたしの傍にいてくれてありがとう。けどね…ベロニカさまは支えてもらうだけなんてゴメンよ。貰ってばかりなんてイヤ。あたしはあたしでカミュを支えたいの。今…アンタが出来ないこと…あたしにしか出来ないことを見つけたわ」

故郷に伝わる伝説の鳥、比翼の鳥。

二人一緒に遙か遠くまで翔んでいくという、雌雄一体の鳥。

カミユはギロリと血のような眼をベロニカへと向けて吼える。だが、ベロニカはその程度では怯まない。

「あたしは怖くない。アンタを一人になんてしない」

翔んで行くなら、この眼の前で苦しむ男と一緒にがいい。

もしもこの先も、カミユがこの魔法に苦しみ続けるなら。

自分にしか出来ない方法で、この男を救い続けてみせる。

いつものように喧嘩しながらでも支え合って、遠く先の未来まで。

「これからもずっと一緒に翔ぶわよ、カミユ。だから——」

もう一步、彼の許へと踏み込む。瞳から小さな水晶が零れ落ちる。

——帰ってきて。あたしのそばに——

苦しむカミユの頬をとつて。

ベロニカはそっと、ゆっくりと唇を重ねた。

カミユの瞳から赤みが薄れていき、あの蒼さが戻ってくる。

顔に刻まれた傷のような模様がすうっと消え、爪や牙も人間のものへと変わっていく。

(――温かい)

同時に意識が戻ってくる。

何が起こったのか分からなかった。

エスタークとの戦いの途中、突然胸を苦しみが襲った時から、殆ど記憶がない。

時折、誰かの声や誰かの名前を呼ばれたような気がする。けど、ただただ暗闇の中、苦しみが増すばかりで何も思い出せなかった。

自分のこと、妹のこと、相棒のこと、仲間のこと。

そして大切な人と、その想いもすらも思い出すことができなかつた。

が、突然頭にかかる暗闇が晴れて、温かさに包まれて眼が覚めてみれば、眼の前には元の姿へと戻った、大切で愛しき女子。

眼を瞑ったまま、これ以上ないくらい密着された格好で。

(べ、ベロニカ？！)

しかも、柔らかく、形の良い感触を唇に感じる。

それがベロニカのものであり、自分がベロニカに口付けされていると分ると、カミュは驚きのあまり身を翻そうとした。

が、逃げるな、とばかりにベロニカがカミュの首後ろに腕を回す。

強く、もっと強く。

(マジか...)

ただ、唇を押し付けられるだけの接吻。

たったそれだけなのに、今まで感じたことのない幸福感と蕩けそうな甘さが全身を包む。

(ベロニカ...)

観念して、その熱に身を任せることにしたカミュは、そのまま、彼女の身体を腰から抱き寄せ、押し付けられただけの唇を、ゆっくりと啄んだ。



この窮まった事態にまさかの、口付け、である。しかもまあまあ長い。

「ベロ…ニカ…」
「お姉さま…！」
「ベロニカちゃん…！」
「なんと大胆な…」
「ベロニカ！やったわね…！」
「は、恥ずかしくて直視できん…」

誰もが眼の前のことを忘れて、ある者は顔を手で覆うほど紅潮させ、ある者は啞然と、ある者は両手を握りしめて歓喜していた。

何故か敵であるエスタークすら苛烈な攻撃の手を止め、呆然として勇者達と揃ってその様子を伺っている。

その口付けの影響なのか、カミュが元通りになっていくのは仲間達にも分かった。

ただ今は二人の——カミュとベロニカの口付けに皆の眼が釘付けであった。

どれくらいの時間、そうしていたのだろうか。

ゆっくりと顔を離したベロニカは、眼の前の男の顔を見た。

「カミュ」

瞳はあの蒼さを取り戻しており、獣のような牙や身体は元通りになっている。

「——ああ、悪かった。もう大丈夫だ」

「本当に？もっと…ちゃんと顔見せて」

手で、元に戻ったことを確かめるように彼の顔をなぞっていく。

相変わらず、ムカつくくらい綺麗な顔だ。

顔の良い男は嫌いだったけど、やっぱり近くで見るとドキドキする。

なにせ、好きになってしまった男なのだ。

それは、いつものカミュだった。

「…ったく、おまえってやつは。無茶しやがって」

「あら、もしかしてひよっこちゃんはキスくらいでドキドキしちゃってるの？大した色男ね」

大人になった彼女の、挑発的な視線に、勝ち誇ったような表情。

ただ、どっちかと言うと顔を今更ながらに紅潮させているのは大きく出たベロニカの方なのだが…今はそんな彼女が、ただただ愛おしい。

「ああ、悪い。もっとしたくて堪らねえ」

「え？ ちょっと…ちょっと！…っ」

意識がなかったとはいえ、先に奪われてしまうとは、盗賊カミュ、生涯一の不覚であろう。

その雪辱を即座に晴らすべく、有無を言わさずに今度はカミュがベ

口ニカの唇を奪う。

先程より深く、もっと深く。

キスとはこうするんだというばかりに。

他称色男は、先にキスして優位に立っていたと思っていただろう哀れな女子を、逃さぬとばかりに絡み取る。

「…っ…んっ…！」

深い口付けに、吐息が漏れる。それと同時に、ベロニカの身体から更に充実した魔力が膨らみ、溢れて彼女を包む。

ベロニカはそんな感覚に見舞われながらも、押し寄せる激しい熱情に対して、必死にカミュの身体に腕を回して応えた。

……完全に自分たちの世界に入ってしまっているお二人さまを見て、仲間達は顔を真っ赤にしつつも首を傾げていた。

「…ゴホン。どういうことだ？ 何故カミュは元の姿を取り戻したのだ？」

一つ咳払いをして咳いたグレイグの言葉は最もだった。

二人の想いが、こういう形であっても成就したのは、陰ながら応援していた仲間としても喜ばしいことには違いないが、進化の魔法で魔物化しそうであったカミュを、ベロニカが口付けで止めた、眼の前で見ていた事実だけ述べればそういうことになる。

「んもうっ！ グレイグったら！ これが愛の力よ！ 愛の！ ラブ、 イズ、 パワーよ！」

「うむむ…愛か。そういうものなのか…」

対するシルビアは、あーん、とばかりに身体をくねらせて、喜びを表せている。

シルビアの意見は誠に彼らしくて、イレブンもその意見を推したいくらいではあるが、グレイグが得心がいかないように、どうもそれだけではないように思える。

「カミュだけじゃないわ。ベロニカも普段だったら大人の姿を保つのはほんの少しの時間だけのはず…なのに今は子供の姿に戻る様子もないのね」

マルティナの言う通り、一時的にペンダントの力で魔力を引き上げて姿を元に戻すことができるベロニカだが、その消費魔力は膨大なようで、ベロニカの魔力を持ってしても短時間しかその姿を保つことが出来ない、というのが仲間達の認識だった。

ただ、今の彼女は子供の姿に戻るどころか、溢れんばかりに魔力が充実しているように見える。

「お爺ちゃん、どういうことか分かる？」

魔力が高まれば魔物にもなり得る、と推測した自身の祖父なら何か分かるかもしれない、イレブンは口を頼った。

「うむ…推測でしかないが、簡単に言えばカミュの増大した魔力をベロニカが吸収したのじゃ。ベロニカが奪われた"魔力の上限"を、進化の秘法で増大したカミュの魔力を吸収して補うことで元に戻ることが出来た…ワシはそう考えてる」

「では、口をさま。お姉さまはこれからもずっと元のお姿でいられるということでしょうか？」

セーニヤは、姉が元の姿を取り戻し、カミュの隣で歩んでいこうと

していたことを誰よりも知っている。

晴れてそれが叶うのであれば、ベロニカの念願は達成されたことになるのだ。

だが、ロウは首を横に振った。

「いや、そうではあるまい。あの姿を保つには、根本的に本来のベロニカが持つ魔力の上限を取り戻さなくてならぬ。でなくては魔力は消費される一方。いずれは子供の姿に戻ってしまうわい。ただ…進化の秘法で魔力が上がり続けるカミュが常に傍におればーー」

その魔力を常に分け与えて貰えれば、ベロニカは常にあの姿をキープすることが出来る。

そしてカミュもまた進化の秘法の影響で高まり続ける魔力を、ベロニカに分け与えることが出来れば、魔物に変わってしまうこともない。

元々が足りなくなっている魔力。

己には多過ぎてしまう魔力。

それを補える二人は、まさに一緒にいることが、二人の為になるということだ。

「んもう、みんな！難しく考え過ぎよ」

だが、男にして乙女の心を持ち合わせる世界最強の旅芸人の意見はやはり少し違う。

「確かに理屈はロウちゃんの言う通りなのかもしれないわ」

ベロニカがカミュの魔力を吸収することでカミュちゃんの魔物化は止まり、ベロニカは元の姿を保つことが出来ている。

口ウの言う通り、結果だけ見ればそれは確かにそうかもしれない。

「それでも…ベロニカちゃんがカミュちゃんのことを好きだったからよ。好きだからキスだって出来た。自分だってどうなるかも分からなかつたのに、それでもカミュちゃんを救おうとしたのよ。だから、やっぱり愛の力。そうでしょ？」

愛の力。

言葉に出来るほど簡単なことではない。

それは、どれほど素晴らしい、輝いている力なのか。

「——うむ、 そうじゃのシルビア。 それだけは間違はあるまい」

口ウだけでなく、皆がシルビアの言葉に微笑んで頷いた。

理屈は色々あるだろう。

けど、やはりそこにあるのは確かに相手を想う愛がある。

互いを想い、二人一緒に歩んでいく。

その二人の関係は、ベロニカが望んだ、まさに比翼の鳥であった。

ようやくカミュから解放されたベロニカの瞳は溢れそうな程潤んでおり、その荒々しい呼吸は怒った猫のようだった。

睨まれたカミュは、やべ、と少々慌て、「やり過ぎた」と若干反省

する。

ずっと欲しかった、大切な女との口付けを、意識がない時に先に奪われたのが、悔しく、また同時に浮かれてたのは間違いないのだ。

「……なっ、なっ、なっ…何すんよの！バカー！！」

キスというものが想像と違いすぎた。

もっとこう、ドキドキするけど、心がポカポカして温かい。キスは心を落ち着かせる素晴らしい行為だとベロニカは思っていた。

が、カミュから齎されたキスは、落ち着くどころか、頭から足の先まで力が入らなくなり、身体が熱さで溶けてしまう、そんな激しいものであった。足に力が入らないくらいである。

当のベロニカは、顔を真っ赤にしてカミュの胸あたりをボコボコぶつ叩いた。子供の姿ではないので、普通に痛い。

「お、おい！悪かったって…痛って！」

「なによ！何よナニよ！ひよっこのくせに！フケツ！変態！バカ！サイテー男！尻軽男！色魔！ナルシスト！あたしの純情を返せ！」

「いやいや、元と言えばおまえの方からーー」

「ちょっと君たち！仲良く喧嘩するのはいいケド、今の状況すっかり忘れてない？！」

イレブンの声に、ハッと二人して振り返ると、地獄の帝王が再び動き出していた。

「グオオッ！！グオオオオオオオオオオオオオオ！」

先程まで想定外の出来事に動きを止めていたエスタークだが、もの凄い怒号をあげる。

身体中から溢れ出る凄まじい邪気。

この邪気は、疾うにこの神殿を飛び出してロトゼタシア中に渡り、新たに現れた脅威として人々に闇の到来を感じさせている筈だ。

だが、そんな新たな闇を前に、今の二人は微塵も畏れを抱いていない。

それどころか、二人には今までに無い余裕すら見える。

「続きは後にするぞ、ベロニカ」

「ええ、後で覚えてなさい！ボーッとしてたらアンタも火傷するわよ？」

守り、守られるではない二人。

攻撃こそ最大の防御と言わんばかりの大火力コンビ。いつもの二人が帰って来た。

「行くわよ、カミュ！」

「よっしゃ！ベロニカ、一気に決めてやろうぜ！」

今まで背中を預けて戦ってきた二人は、どんな敵が立ちはだかるうと、これからも変わらない。

隣に並び立った二人は、三度エスタークに挑む。

「随分待たせたな、地獄の帝王。ただ…今度のオレ達はちょっと強いぜ？」

不敵な笑みを浮かべたカミュは、トントンとステップを踏んで再び分身した。

ただ、それもいつもの三人に分身するのではなく、更に増えて五人

に。

「分身で五人だと？！」

「高まった魔力が、カミュに力を与えているのね」

カミュの神技は、進化の秘法の魔力により、更に研ぎ澄まされていく。

その五人がそれぞれ両手に持つ最高峰のブーメラン、"ハイパー・ノ・ヴァ"と"破天の月輪"が魔力を纏い、青白く、鬼火のように揺らめいた。

「切り刻め…デュアル…ブレイカー！！！」

豪雨のように降る、ブーメランの熾烈な波状攻撃。

それはまさに、斬撃の嵐と呼ぶに相応しい。

そもそもが複数攻撃であるブーメランの奥義だが、五人の分身によるそれは、もはやどれだけの数か分からない程のブーメランが、エスタークに襲いかかる。

"ガアアアア…！！"

巨軀であるが故にその殆どを受けたエスタークは、片膝をついた。デュアルブレイカーの効果で、状態異常にもかかりやすい状態だ。

「今だ！みんな、一気に押し込むよ！！」

今こそ、再びロトゼタシアを救う。

勇者の号令の下、畳みかけるように全員がエスタークへ攻撃を集中する。

斬撃、魔法、格闘、戦闘芸。

あらゆる攻撃で地獄の帝王を追い詰めていく。

対するエスタークも最大級の魔法やブレス、剣技で頑強に抵抗するが、それでも今や勢いは完全に勇者とその仲間達にあった。

進化の秘法ですら追いつけぬ程、猛烈な攻撃の前にエスタークはどんどん押しやられていく。

"グオアアアアアツーー！！"

追い詰められて後がないエスタークの双剣が、不気味で黒炎のようなオーラを纏う。

「あれは…！」

ダークブレイク。

勇者のギガブレイクをも超える闇の究極剣。
地獄の帝王ならではの奥義であろう。

暗黒の炎雷を宿した斬撃。進化の秘法での強化も相俟って、先程のギガブレイクをも超える威力であるのは間違いない。

「させないわ！」

そうはさせまいと、ベロニカは自身に宿った魔力を掌に集め、エスタークへ向けて全てを解き放つ。

「マダンテ！！」

暴走した魔力が、ダークブレイクを放とうとしていたエスタークを軽く飲み込んでしまう程の大爆発を起こした。

これまでの戦いの影響もあるだろうが、今の一撃でエスタークどころか、頑丈で巨大な神殿が、もはや崩壊寸前である。

「えー……」

「なんと凄まじい威力じゃ…」

圧倒的すぎる破壊力に、もはや言葉も出ないイレブンとロウの咳きに、全員が唾を飲み込んで頷いた。

カミュとの口付けにより、更に魔力の高まったベロニカのマダンテは、闇の究極剣であるダークブレイクまで打ち消してしまったのだ。

ただ、それでも、まだエスタークは斃れてはいない。

がらがらと崩れる瓦礫の中で、角は折れ、呻き、刀は碎けても、まだ立ち上がろうとする。

それは地獄の帝王の矜持か、はたまた変わり果てたエースが持っていたベロニカに対する執念の果てなのか。

「——いいわ。とことん、付き合ってあげる。カミュ！」

魔力を使い果たして再び小さくなってしまったベロニカが、とことこカミュの傍へとやって来て、カミュに両手を差し出した。

これは所謂、子供が抱っこを求めるポーズである。

「は？ お、おい…ベロニカ？」

「抱っこして！ 早く！」

「だ、抱っこだあ？」

魔力のぶっ放し過ぎで一瞬中身まで子供に戻ってしまったのかとも

思ったが、真剣な表情だったので、とりあえず言われるがままにカミュはベロニカを抱き上げる。

眼を瞑ったベロニカ。そのまま小さな唇が、またしてもカミュの薄い唇を噛みつくようにして奪った。

「…？！？！」

当然唇を奪われた本人もだが、一同は再び啞然とする。

すると再び、カミュの魔力を吸収して、ベロニカの魔力が身体から溢れ、ベロニカの身体がカミュの腕の中で、元通りに大きくなる。

呆気に取られるカミュの隣で、ベロニカはボロボロになったエスタークへ瞳を向けた。

「あたしは…この世界をみんなと生きる。楽しいことも辛いことも…みんなと…それにカミュと分かち合って生きていく。アンタはもう一度、大樹に謝って生まれ変わって出直して来なさい。生まれ変わって、生きるってことがどれくらい素晴らしいことなのか、ちゃんと正面から向き合いなさい。それが分かったなら、また魔法の話し相手ぐらいにはなってあげるわ、ひよっこちゃん」

カミュに抱き止められながら、ベロニカは苦しむ"エース"へ左手の掌を向けた。

そして、右手でしっかりカミュの手を握る。

「カミュ、多分さっきより凄くなるわ。このまま…支えておいてくれる？」

「ああ…任せろよ、ベロニカ。これで決めちまえ」

どんなことがあっても離すまいと、ぎゅっと互いの手を握り合う。

その想いも込めて、再びベロニカの魔力の全てが掌に集中し、一気に解き放たれる。

「——マダンテ！！！」

撃破りの本日二度目の究極魔法。

先程よりさらに暴走した魔力の大爆発が、激流のように地獄の帝王を飲み込んでいく。

"-----....."

断末魔すら残さぬほどの二人のマダンテの前に。

"地獄の帝王"エスタークは、影も形も残すことなく、文字通り消滅した。

ベロニカの魔力が、完全に進化の秘法を上回ったのだ。

それにより、キラキラと昇華した魔力の残滓が小雨のように降る中で。

ベロニカは再び子供の姿に戻ってしつついたが、二人の手は、しっかりと握られたままであった。

「...終わったね」

長い安堵のため息の後、イレブンは勇者の剣を、仲間たちもそれぞれの得物を納刀する。

最後は二人に全て持っていたが、シルビアが言うところの"愛の力"が、世界の脅威に打ち勝ったのだ。作り話の物語でもこうはいかないに違いない。

——ただ、イレブンの言う通りに、まだ全てが終わった訳ではなかった。

ふと気が抜けたように、カミュはベロニカを腕に抱きとめたまま、どさっとその場に座り込む。

「…終わったな」

「ええ。初めはどうなるかと思ったけど…やっぱり最後を決めるのはこの天才魔法使い、ベロニカさまだったわね」

「ああ。天才魔法使いで、しかも変身の達人だぜ。1日に何回姿を変えるんだ？」

カミュは、腕の中で「ふふん」と得意げな小さな恋人をいつものようにはね揃う。

「う、うるさいわよ！アンタだってあたしの力がないとすぐに変身しちゃうんだからお互い様じゃない！」

「ああ、そうだ。おまえから濃い接吻を貰わないと、オレはあつという間に魔物になっちまうからな。これからも毎日、宜しく頼むぜ？天才魔法使いのベロニカさま」

ベロニカの脳裏に、先程カミュから受けた熱い口付けの記憶が蘇り、瞬時に顔が熱を帯び、頬が朱に染まる。

「毎日…濃い…せ、接吻…って！アンタねえ…もっと口マンチックな言い方は無いわけ？！」

「悪いな、育ちが良くねえ盗賊なもんで」
「こんな時だけ盗賊顔するんじゃないわよ！ひよっこイガ頭！」

相変わらず喧しく始まった二人のやりとりを見て、仲間たちは苦笑する。

「んもう、相変わらずねえ」
「本当、前に進んだのか、そのままなのか…」
「ホッホッホ。心配することはないぞ二人とも。普段はアレぐらいの方が二人らしいわい」
「まさに夫婦喧嘩は犬も食わぬ、ですな」
「あの、イレブンさま。一体力ミュさまはお姉さまにどのような…く、口付けをされたのでしょうか？お姉さまは、いつになくお顔が赤く…」
「セーニャ！それはボクじゃなくてカミュに聞いて！」

呆れるような、微笑ましいようなやりとりにため息をつきつつも安堵する者や、純粋な疑問をぶつける者、あらぬ方向からの攻めにまごつく者。

ただ、一つだけ分かっていることがある。

これからも二人は今までと変わらないような関係の中で、深い深い絆を育んでいくんだということ。

人生はベロニカの言う通り、辛いことだってある。物語のように上手くいかないことの方が圧倒的に多いだろう。

それでもあの二人は、二人らしいやり方で互いを支え合って越えていくに違いない。

ずっと二人を見て来た仲間達にとって、それは想像に難くない二人の未来の姿だった。

「…そういえば」

ピタリと口喧嘩を止めたベロニカが、何かを思い出したようにカミュのことを、ジッと見つめる。

「な、なんだよ？」

急にしおらしく黙ってこちらを見上げるベロニカに、カミュもいつもの調子を崩す。

「アンタ、あの時なんて言ったの？」

「あの時？」

「キラークリムゾンと戦う直前よ。何度も聞かせてやるって言ってたじゃない」

ぎくり、とカミュの身体が固まる。

「なんだったの？あの時アンタが言ったことって」

ちょっと膨れる彼女の、でも色々期待してしまっている董色の瞳が、真っ直ぐにカミュを覗き込む。

"オレの大切な女"

あの時は当然気持ちを伝える気でいたのだが、今や色々すっ飛ばして事実上恋仲となったのだ。あんなキザなセリフ吐くようなガラではないので、今更のように頭を抱え込むほど恥ずかしい。

「あーー…なんだったっけか？」

「は？！しらばっくれる気？！信じらんない！！」

眼を逸らしたカミュの腕の中で、小さなベロニカが彼の胸ぐらを掴み、ぐらぐらと揺らす。

一方のカミュはベロニカを抱きかかえたままなので、されるがままである。

「さっさと観念して言いなさい！ 言うまで口もきいてやらないんだから！」

どうやら本気でお怒りらしい。
これは逃げられそうにない。

観念したカミュは、しょうがねえな、と覚悟して眼を閉じ、今一度深呼吸をする。

「オレの——」

「カミュ！ 大変だよ！」

突然のイレブンの声に、覚悟を決めて言いかけたカミュも、少しドキドキしていたベロニカも、あっさり現実に引き戻される。

何事かと振り返ってみれば。

「いかん、神殿が崩れるぞい！」

焦ったロウの言う通り、エスタークとの激闘に撃破りの二度のマダンテを放たれた戦場は、建っているのが不思議なくらいボロボロであり、落盤などの崩壊が始まった。

「…マジか。 ちょっとは手加減しろよな」

「仕方ないじゃない…マダンテは調整なんて出来ないのよ…」

そう言うベロニカも、崩壊し始めた神殿を見て、流石にやり過ぎたとは思っているらしい。

一応禁断の術が封印された神殿。調べれば歴史的価値の高いものが他にもあったのかもしれない。

それがこの崩壊で一切無くなるのだ。

が、今は正直そんなことはどうでも良かった。

「…とりあえず逃げるか」

「ええ…全速力よ」

そう言って二人は、脱兎の如く逃げ出す。

「ちょ、ちょっと待ってよカミュ！」

イレブンたちも当然、全速力でスタコラと逃げ始める。

あの厳しい戦闘の後で、まだこんな力が残っていたのかと思うほどだ。流石は勇者とその仲間達である。

ただ。

「ちょっとカミュ！離しなさい！あたしも自分で走るから！」

ベロニカはカミュに所謂"お姫様抱っこ"で抱えられたままだ。あのまま走りだしたのだから当然である。

「この格好もやめて！恥ずかしい！すぐ降ろしなさい！」

「うるせえ！子供の姿なんだ！黙って今は抱っこされてろ！！」

有無を言わさず、カミュは暴れるベロニカ更に抱き寄せた。

速い、速い。グングンとスピードを上げるカミュは流石である。

ベロニカも振り落とされないように、カミュの服をぎゅっと握る。

その姿は再び、二人で大空に舞う、比翼の鳥のよう。

「——大切な女」

「——え？」

カミュが走りながら呟いた言葉。今度は聞き逃さなかった。

「オレの大切な女を絶対に渡しはしねえ！ そう言ったんだ！ これで恥ずかしいのはおあいこだろ！」

そう言うカミュの耳や顔が、少し赤い。

「…えへへ」

そんな彼の顔を見たベロニカは、場違いな温かさに包まれる。

頬を緩ませて、走るカミュの胸にストンと小さな額を預けて、素直に一言だけ呟いた。

「ありがとう。大好きよ、カミュ」

了